

SCORM 2004 テストスイート解説書

第 1.0 版

2006 年 3 月

特定非営利活動法人日本イーラーニングコンソシアム

クレジット表記と再配布のガイドライン

本書は特定非営利活動法人日本イーラーニングコンソシアム（略称：eLC）の著作物である。

本書は経済産業省がスポンサーとなりSCORM（Sharable Content Object Reference Model）の普及促進を目的として作成された。

eLC（ライセンス提供者）は、他者（ライセンス受領者）に本書のコピー、配布、表示、ハイパーリンクの生成を許可する。代わりに、ライセンス提供者のクレジット（上記アンダーラインの文章）を明記しなければならない。

また、ライセンス受領者はライセンス提供者の許可なく本書を商用利用してはならない。

目次

1	TEST SUITEの概要	2
1-1	TEST SUITEの入手方法.....	2
1-2	TEST SUITEの動作環境.....	2
1-3	TEST SUITEのインストール手順	2
1-3-1	Javaソフトウェアのインストール.....	2
1-3-2	Test Suiteのインストール.....	3
1-4	その他の設定	5
2	適合性検査	9
2-1	LMS適合性検査の操作手順	9
2-1-1	LMS適合検査.....	9
2-2	コンテンツ適合性検査の操作手順	16
2-2-1	コンテンツパッケージ適合検査	16
2-2-2	SCOランタイム適合試験.....	22
2-2-3	メタデータ適合試験.....	26
2-2-4	マニフェスト適合試験.....	31
2-3	検査結果	34
2-3-1	テストログのアイコンの説明.....	34
2-3-2	LMS適合マトリクス.....	35
2-3-3	コンテンツパッケージ適合マトリクス.....	36
2-3-4	SCO適合マトリクス.....	36
2-3-5	メタデータ適合マトリクス.....	37

1 Test Suite の概要

SCORM 2004 Conformance Test Suite Version 1.3.3 (Self Test) (以降、Test Suiteと略)は、ADLが開発した、LMS、SCO もしくは メタデータ を診断するためのツールです。

Test Suite は、SCORM2004 規格に適合しているかどうかを診断します。

Test Suite には、下記の 5 種の検査項目で構成されています。

- ・ LMS ランタイム適合性検査
- ・ コンテンツパッケージ適合性検査
- ・ SCO ランタイム適合性検査
- ・ メタデータ適合性検査
- ・ Manifest 適合試験

1-1 Test Suite の入手方法

Test Suite は、ADL の Web サイトより入手することができます。

<http://www.adlnet.org/downloads/>

1-2 Test Suite の動作環境

Test Suite の動作環境は下記の通りです。

OS	Microsoft Windows 2000 SP2, XP SP1, XP SP2
ブラウザ	Internet Explorer 6.0 Netscape7.0
JAVA	Java(TM) 2 SDK, Standard Edition 1.4.1 以上 Java(TM) 2 Runtime Environment, Standard Edition 1.4.1 以上

上記以外の環境では、一切動作保障がありません。

1-3 Test Suite のインストール手順

1-3-1 Java ソフトウェアのインストール

Test Suite のインストールを行う前に、Java ソフトウェアをインストールします。

JAVA ソフトウェアは、下記のページより入手することができます。

<http://java.sun.com/products/archive/>

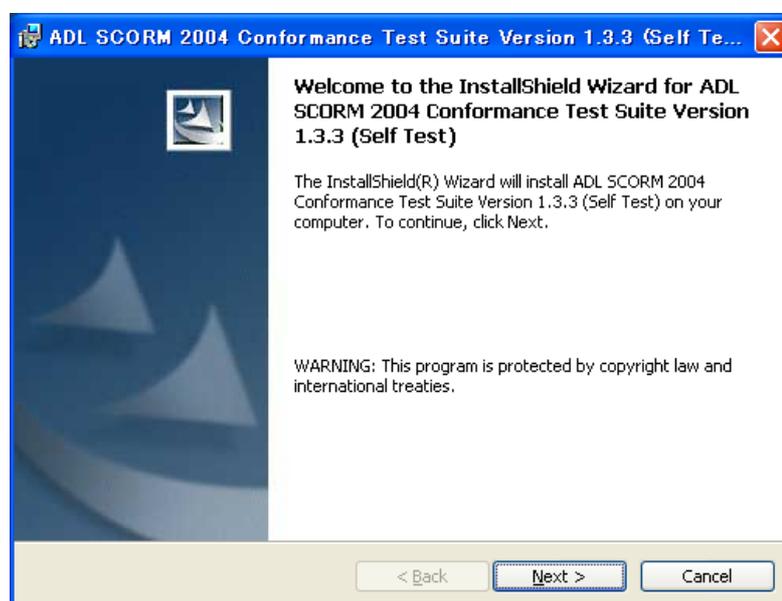
“ J2SDK/J2RE _ 1.4 ” のリストより、1.4.1_07 をダウンロードし、インストールを行ってください。

1-3-2 Test Suite のインストール

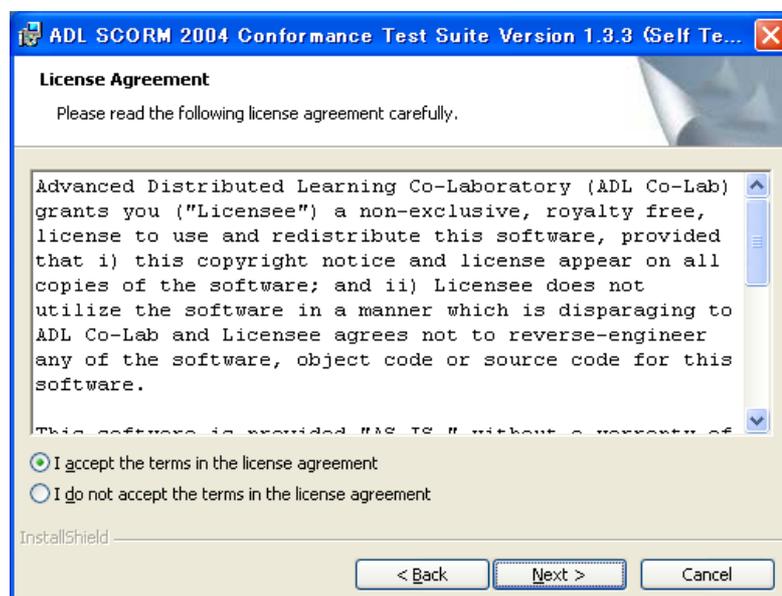
Java ソフトウェアのインストールが終了したら、Test Suite のインストールを行います。

- 1) <http://www.adlnet.org/downloads/>にアクセスし、“ SCORM 2004 Conformance Test Suite Version 1.3.3 (Self Test) ” をクリックします。
- 2) “ SCORM2004_TestSuite1_3_3ST.zip ” をダウンロードします。
- 3) ダウンロードした “ SCORM2004_TestSuite1_3_3ST.zip ” を展開します。
- 4) 解凍後に作成された “ SCORM2004_TestSuite1_3_3ST.exe ” をダブルクリックして実行します。

- 5) 『Welcome to the ...』と書かれたダイアログが表示されます。
[Next]ボタンをクリックします。



- 6) 『License Agreement』ダイアログが表示されます。「I accept the terms in the license agreement」を選択し、[Next]ボタンをクリックします。

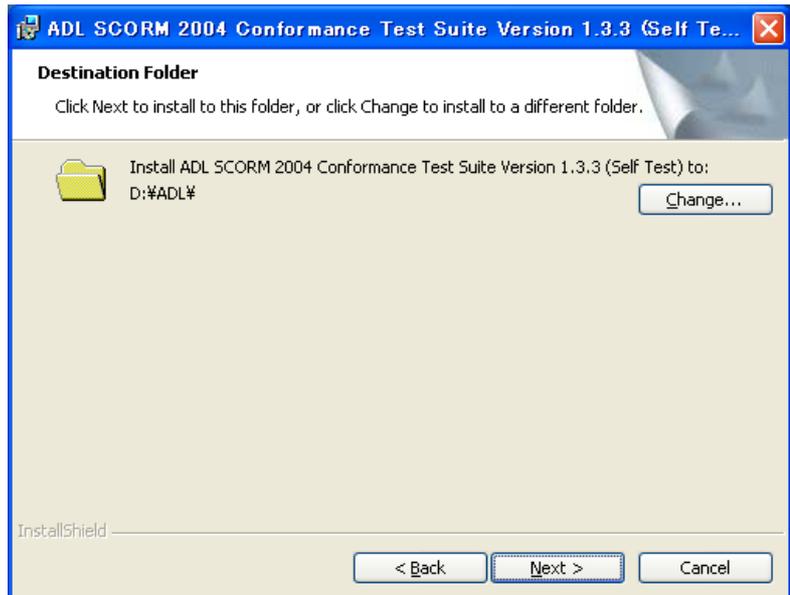


- 7) 『Destination Folder』ダイアログが表示されます。
インストール先のディレクトリを指定し、[Next]ボタンをクリックします。

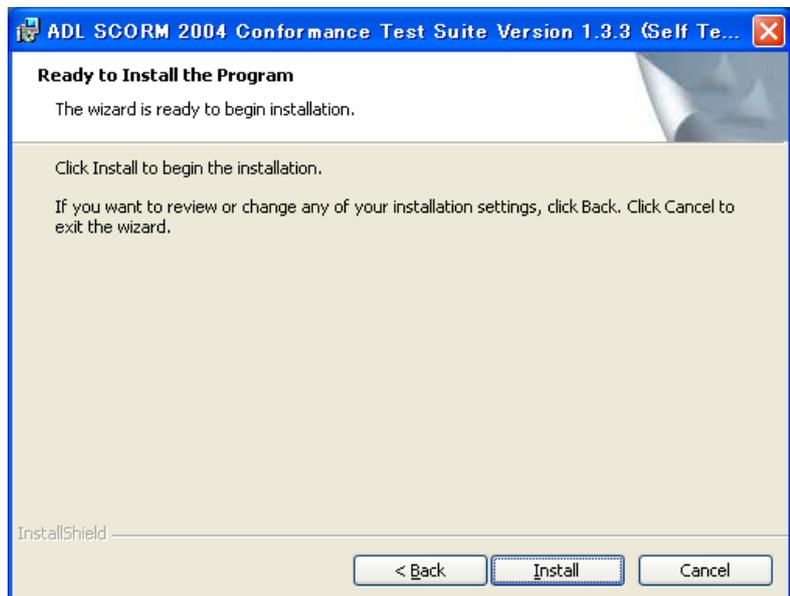
【注意】

Test Suite は、インストール先のディレクトリに TestSuite1_3_3ST という名前のディレクトリを追加し、そのディレクトリ内にインストールされます。

また、Readme.html では、C:¥ADL¥TestSuite1_3_3ST というフォルダにインストールされているとして説明していますので、異なるディレクトリにインストールする場合は適宜読み替えてください。

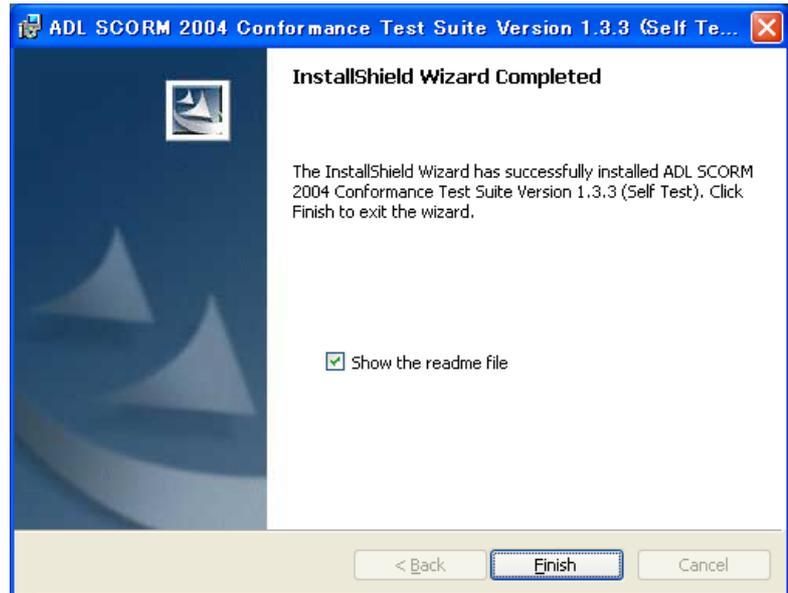


- 8) 『Ready to Install the Program』ダイアログが表示されます。[Install]ボタンをクリックします。



- 9) プログラムのインストールが始まります。

- 10) 『 InstallShield Wizard Completed』ダイアログが表示されるとインストールの終了です。[Finish]ボタンをクリックして、終了してください



1-4 その他の設定

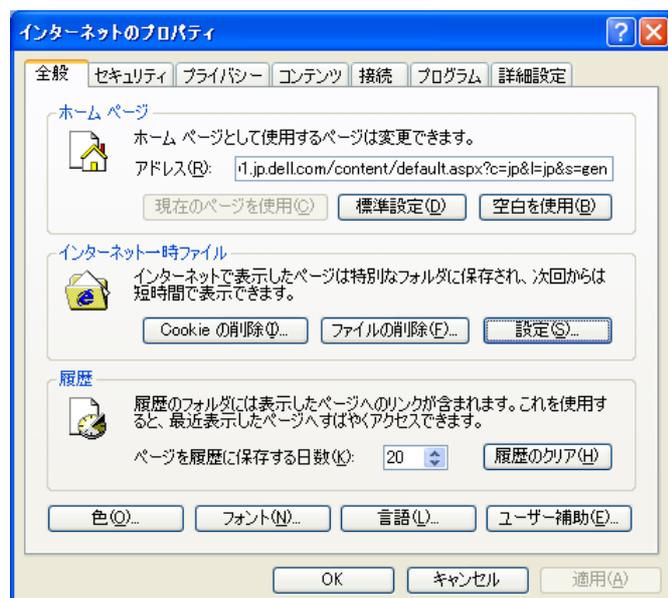
Test Suite を実行するには、ブラウザや JAVA プラグインの設定を下記のように変更してください。

- インターネット一時ファイルの設定

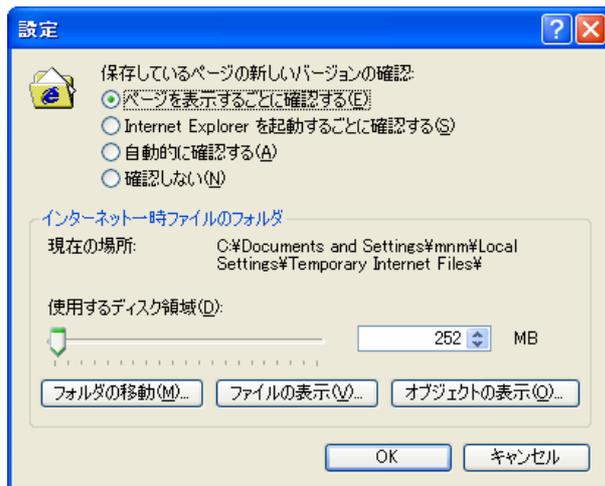
- 1) デスクトップにある Internet Explorer アイコンを右クリックし、表示されたメニューより[プロパティ]を選択します。

- 2) 『インターネットのプロパティ』ダイアログが表示されます。

- 3) [全般]タブを開き、“インターネット一時ファイル”欄の[設定]ボタンをクリックします。



4) 「ページを表示するごとに確認する」を選択し、[OK]ボタンをクリックします。



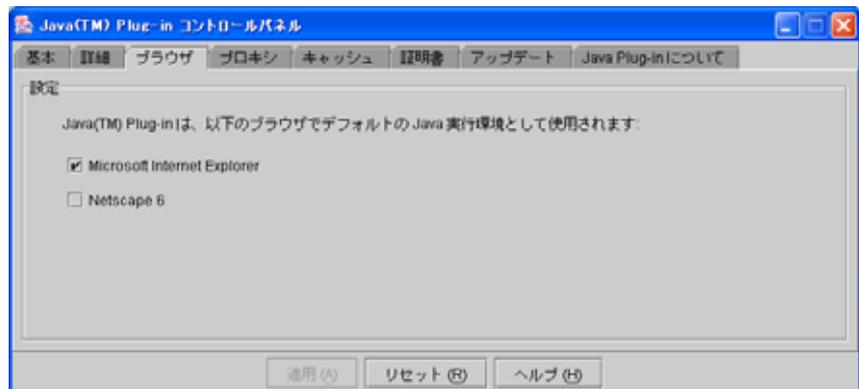
5) [OK]ボタンでダイアログを閉じます。

■ Java プラグインの設定

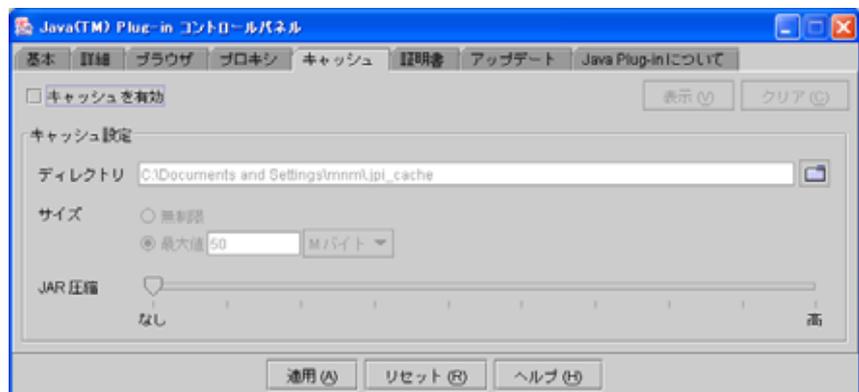
1) コントロールパネルを開きます。

2) 『Java Plug-in コントロールパネル』を開きます。

3) [ブラウザ]タブを開き、
・ Internet Explorer を使用している場合は、「Internet Explorer」
・ Netscape を使用している場合は、「Netscape 6」
を選択します。



4) [キャッシュ]タブを開き「キャッシュを有効」のチェックを外します。



5) [適用]ボタンをクリックし、Java Plug-in コントロールパネルを閉じます

▪ ポップアップブロッカーの無効化

ポップアップブロッカーをご利用の場合には、Test Suite を実行する場合、無効に設定して下さい。

ポップアップブロッカーは、

- ・ goo スティック
- ・ Google ツールバー
- ・ yahoo ツールバー
- ・ Norton Internet Security

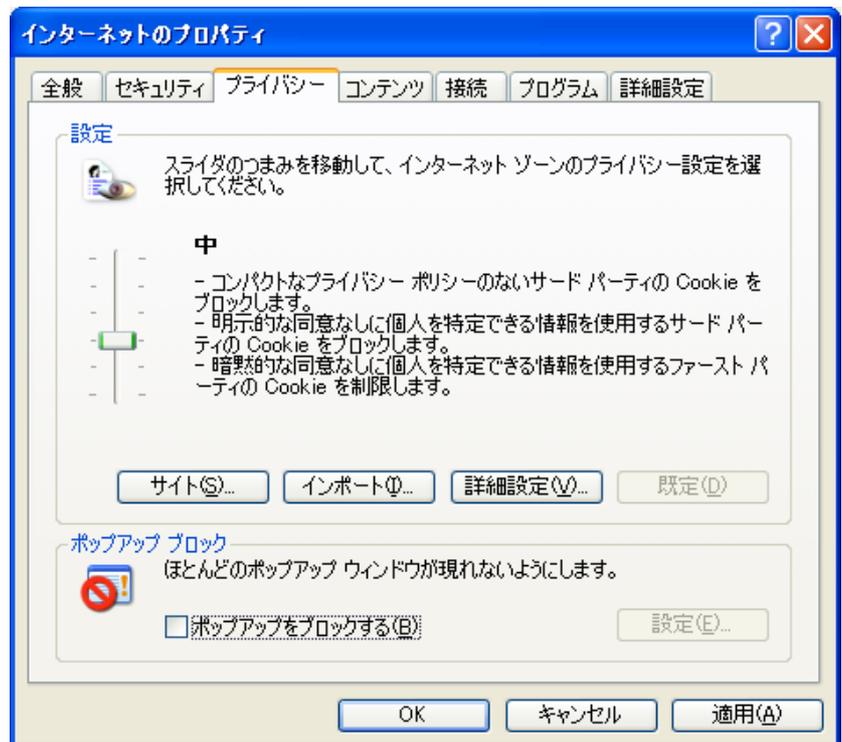
などに搭載されている機能です。

▪ Windows XP SP2 を利用している場合

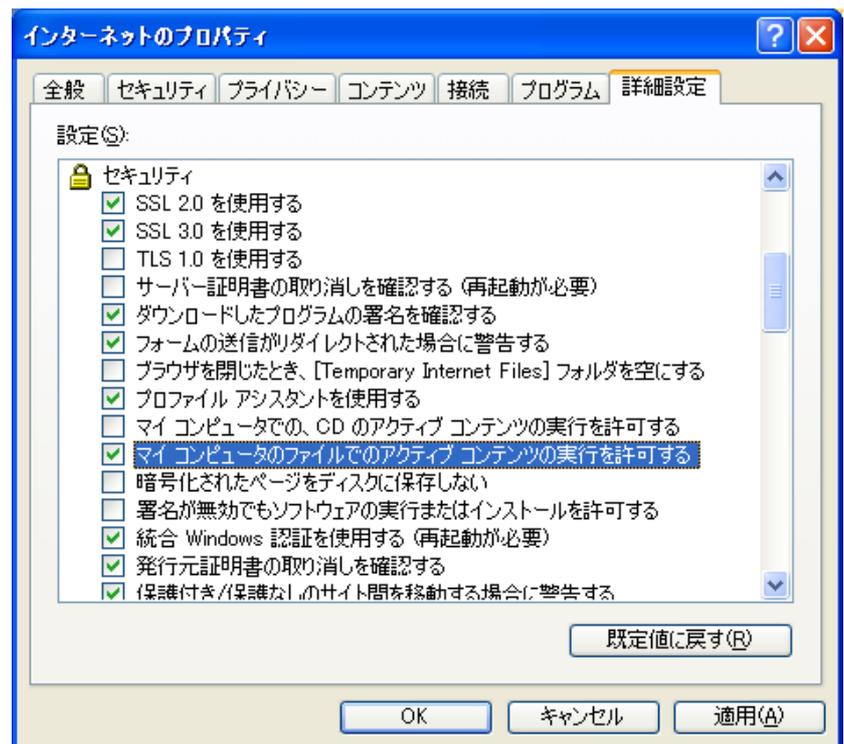
1) デスクトップにある Internet Explorer アイコンを右クリックし、表示されたメニューより[プロパティ]を選択します。

2) [プライバシー]タブを開きます。

3) “ポップアップ ブロック”欄の「ポップアップをブロックする」のチェックを外します。



- 4) 続いて[詳細設定]タブを開きます。
- 5) “セキュリティ”欄の「マイコンピュータのファイルでのアクティブコンテンツの実行を許可する」にチェックを入れます。
- 6) [OK]ボタンをクリックしてダイアログを閉じます。



2 適合性検査

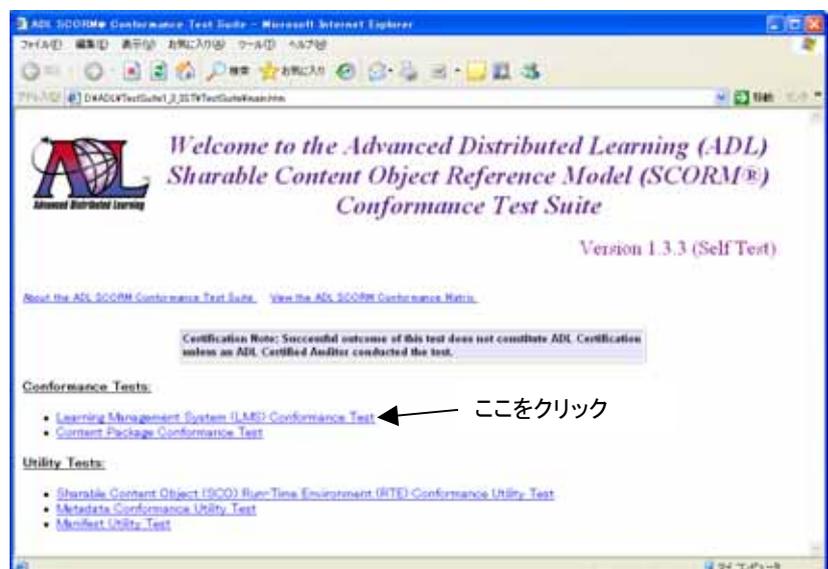
この章では、教材コンテンツの SCORM2004 規格への適合性を、Test Suite を使用して検査する方法を説明します。

2-1 LMS 適合性検査の操作手順

LMS 適合性検査の操作手順を説明します。

2-1-1 LMS 適合検査

- 1) LMS Test Content PackagesをADLのWebサイトよりダウンロードします。
http://www.adlnet.org/downloads/にアクセスし、“ SCORM 2004 Conformance Test Suite Version 1.3.3 (LMS Test Packages) ” をクリックします。
- 2) “ LMSTestPackages1_3_3ST.zip ” をダウンロードします。
- 3) ダウンロードした “ LMSTestPackages1_3_3ST.zip ” を展開し、LMSに登録します。
- 4) LMS に下記のテスト用ユーザを登録します。
ユーザ名： Joe Student
ユーザ名： Mary Learner
- 5) 手順4で登録した2人のユーザに、59のテスト コンテンツ パッケージの学習ができるよう設定を行います。
- 6) デスクトップにある “ Test Suite 1.3.3 ST ” アイコンをダブルクリックして実行します。
- 7) “ Learning Management System (LMS) Conformance Test ” をクリックします



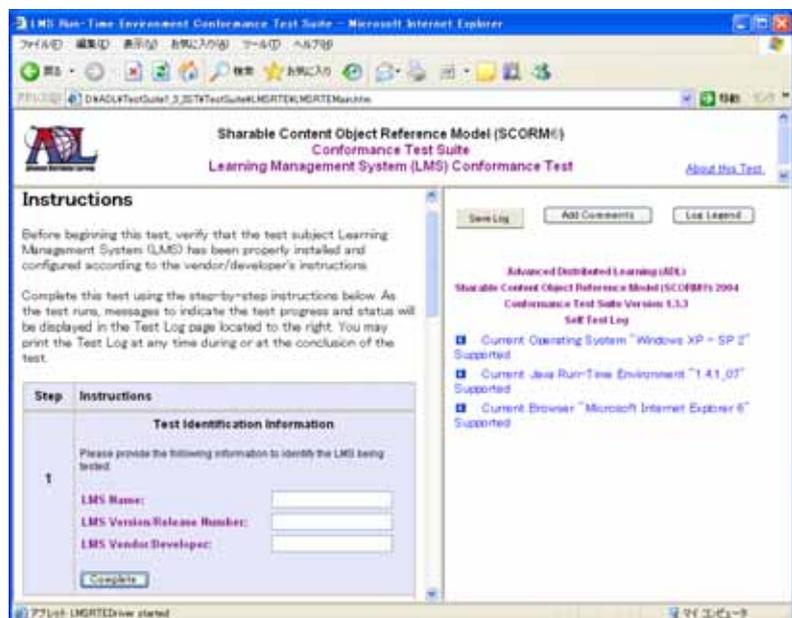
- 8) 『警告 - セキュリティ』ダイアログが表示されたら、[はい]をクリックします。

POINT !

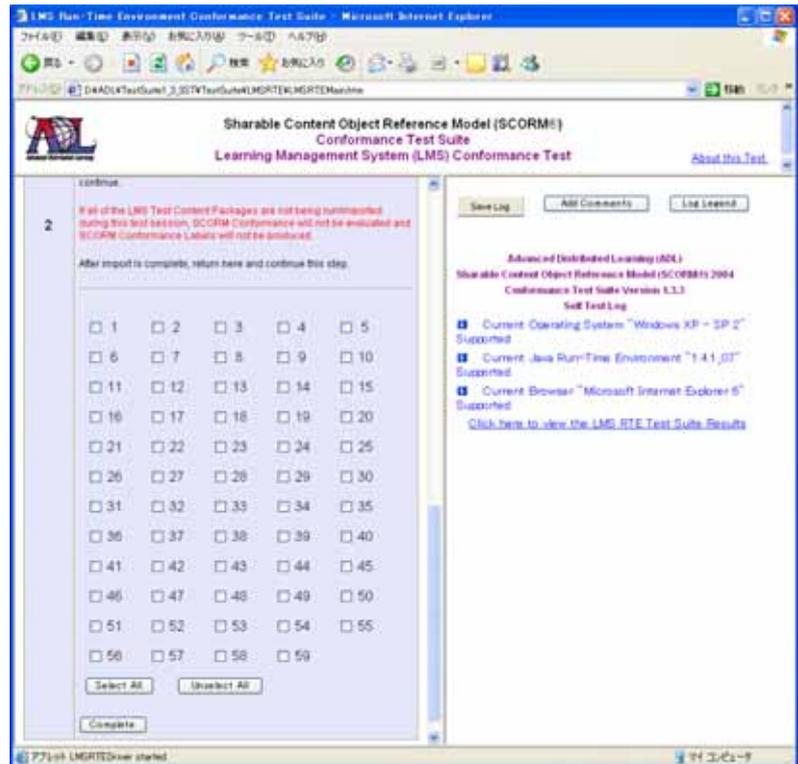
[常に]をクリックすると、次回よりこのダイアログが表示されことなく使用できます。



- 9) LMS 名、LMS のバージョン、LMS 製作者情報を入力し、[Continue]ボタンをクリックします。



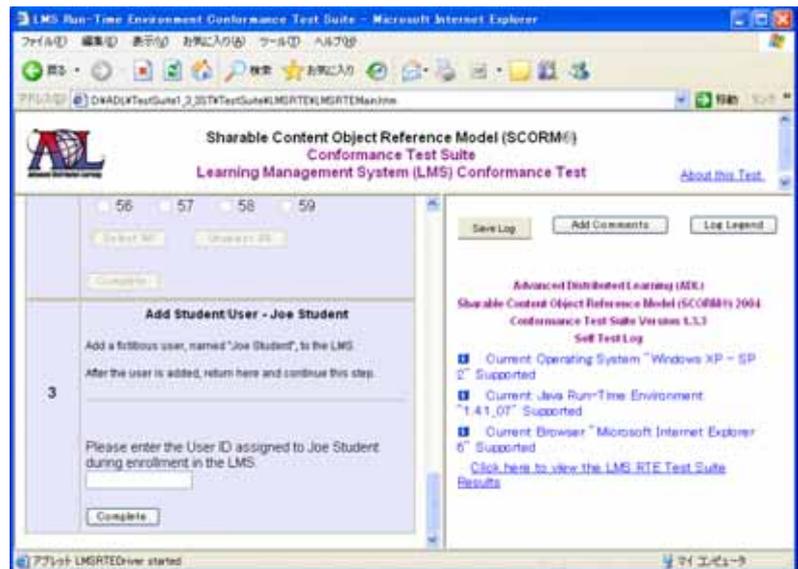
10) テストを行う Content Package 番号を選択し、[Complete]ボタンをクリックします。



11) すべてのテストパッケージを選択していない場合、右のような警告ダイアログが表示されます。[OK]ボタンをクリックします。

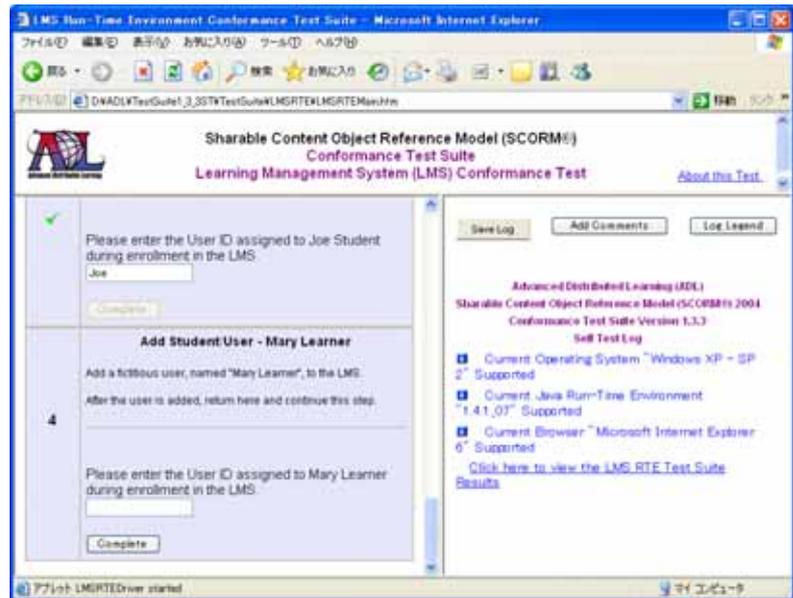


12) 【テストパッケージ 1 を選択した場合にのみ、表示されます】
Joe Student の UserID を入力し [Continue]ボタンをクリックします。



- 13) 【テストパッケージ 2~59 を選択した場合にのみ、表示されます】

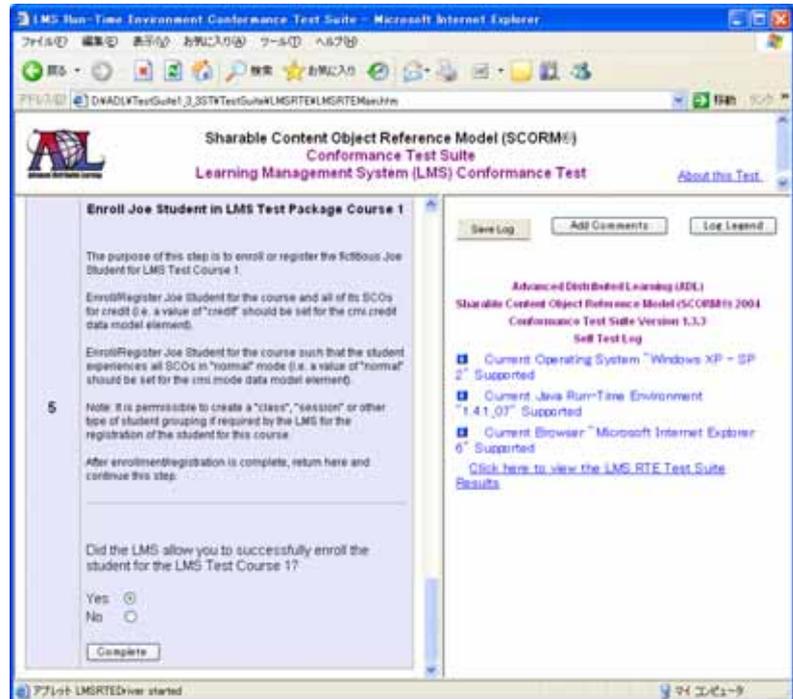
Mary Learner の UserID を入力し[Continue]ボタンをクリックします。



- 14) 【テストパッケージ 1 を選択した場合にのみ、表示されます】

Joe Student のユーザ登録が成功している場合は[Yes]を選択し、[Complete]ボタンをクリックします。

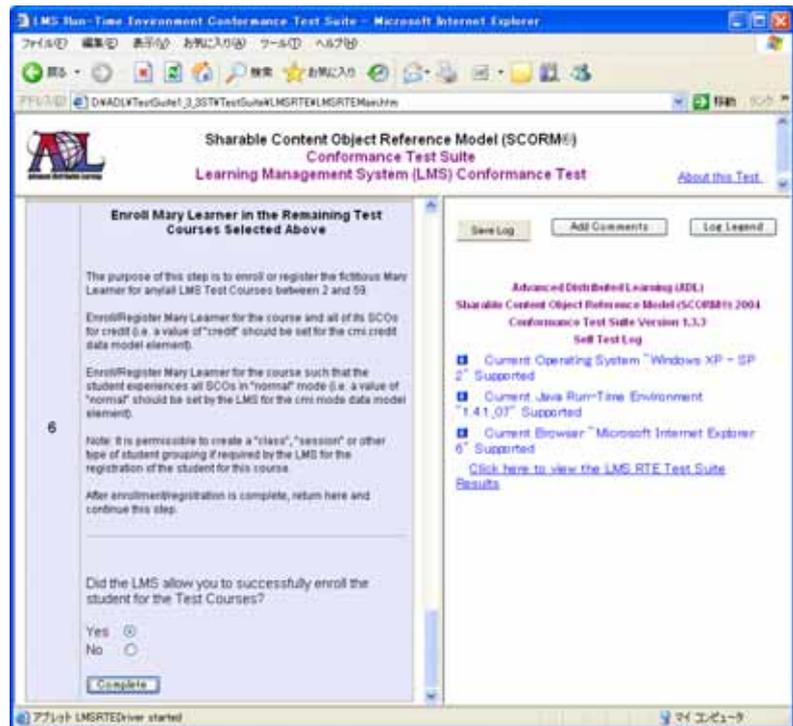
成功していない場合は、[No]を選択してから[Complete]ボタンをクリックし、[Add Comment]ボタンより、登録エラーとのコメントを記述します。



- 15) 【テストパッケージ 2～59 を選択した場合にのみ、表示されます】

Mary Learner のユーザ登録が成功している場合は[Yes]を選択し、[Complete]ボタンをクリックします。

成功していない場合は、[No]を選択してから[Complete]ボタンをクリックし、[Add Comment]ボタンより、登録エラーとのコメントを記述します。

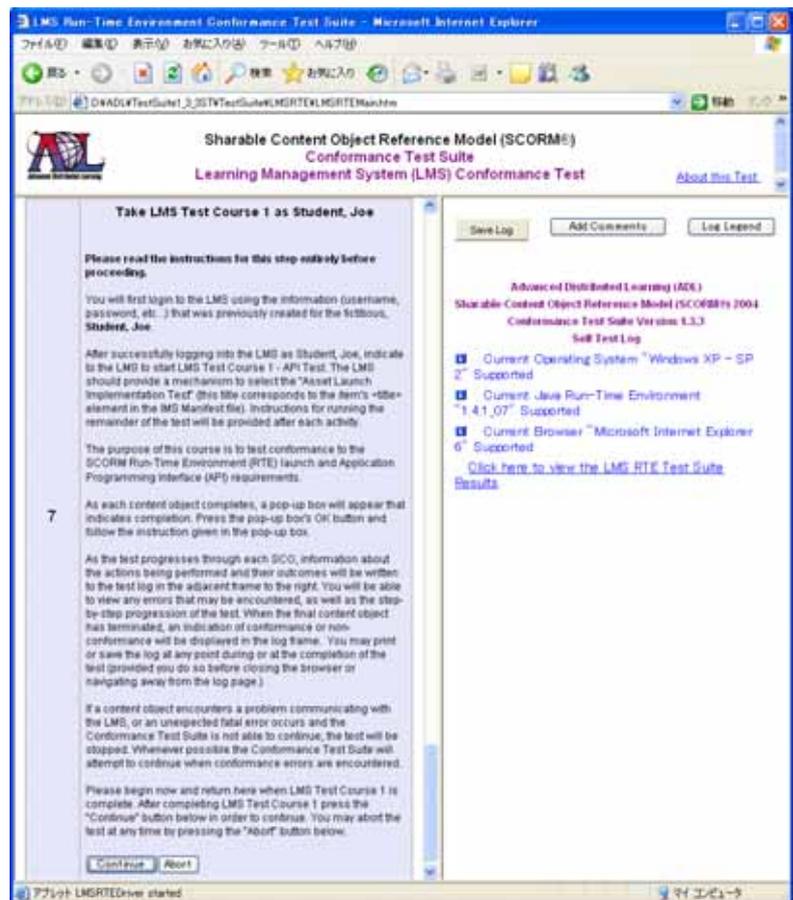


- 16) 右のテスト項目が表示されたら LMS を起動し、

【LMS Test Course 1】の試験を始めるには、Joe Student のアカウント

【LMS Test Course 1 以外】の試験を始めるには、Mary Learner のアカウントでログインします。

- 17) LMS からテストパッケージの学習を開始します。



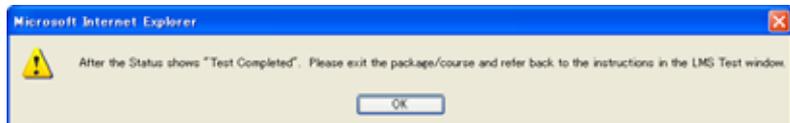
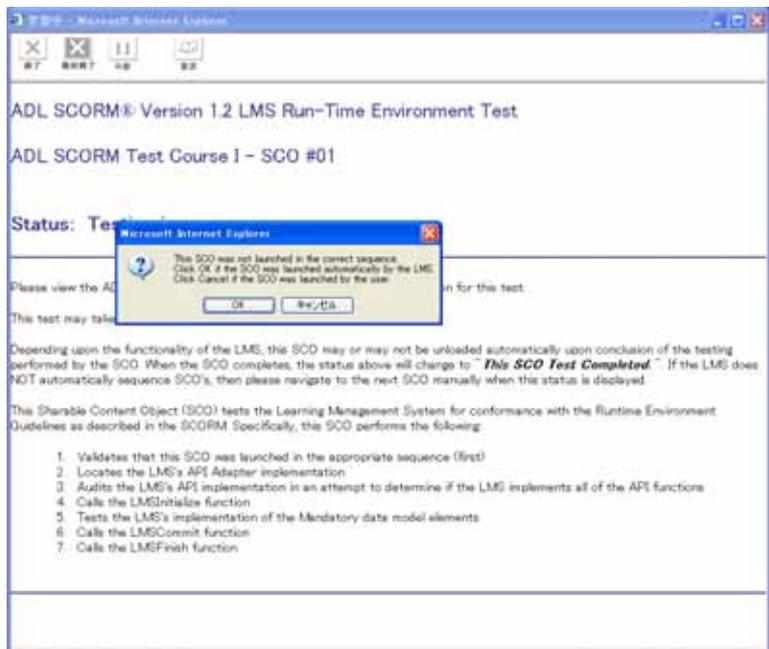
18) 右のようなアプレットに対するセキュリティ警告が表示されたら [はい] を選択します。

POINT !

[常に] をクリックすると、次回よりこのダイアログが表示されることなく使用できます。

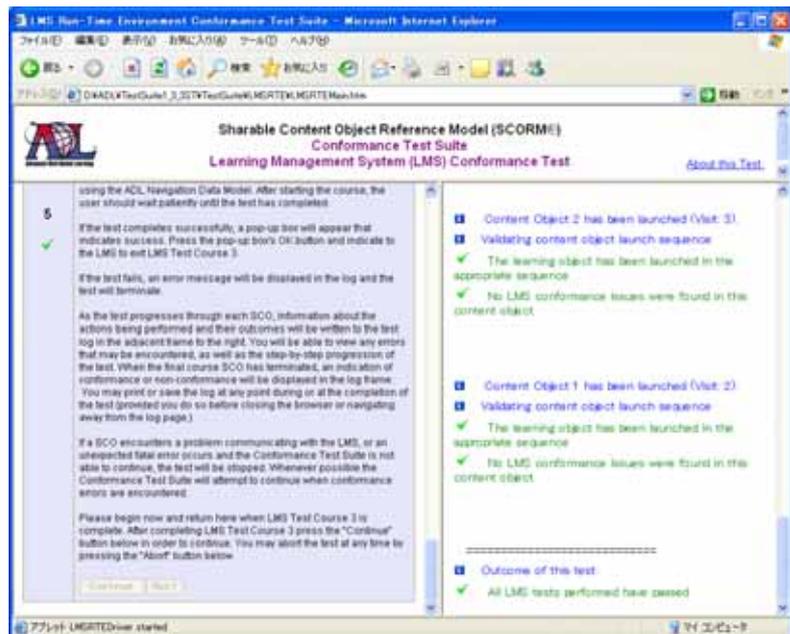


19) 【テストパッケージ 1~2】
SCO が起動すると、ダイアログが表示されます。
ダイアログの支持にしたがって、操作を行ってください。
【テストパッケージ 3~59】
テストが自動で実行されます。
終了までお待ちください。



20) 右のダイアログが表示されたら [OK] ボタンをクリックし、画面に "Test Completed" というメッセージが表示されることを確認します。メッセージが表示されたら、学習終了処理を行います。

21) LMS の学習終了処理が終了したら Test Suite の画面に戻り、[Continue] ボタンをクリックします。
検査が正常終了すると、緑色のチェックが表示されます。



22) テスト結果を保存する場合には、右ウィンドウの一番上にある [Save Log] ボタンをクリックします。
[Add Comments] ボタンをクリックすると、ログにコメントを追加することができます。

POINT!

ここで保存された結果は summary です。詳細なログは、下記に保存されています。

<drive>:\%<install_directory>%TestSuite\Log
s\LMS\Detailed%\<yyyymmddhhmmss>_LMSRTE_Log.htm

2-2 コンテンツ適合性検査の操作手順

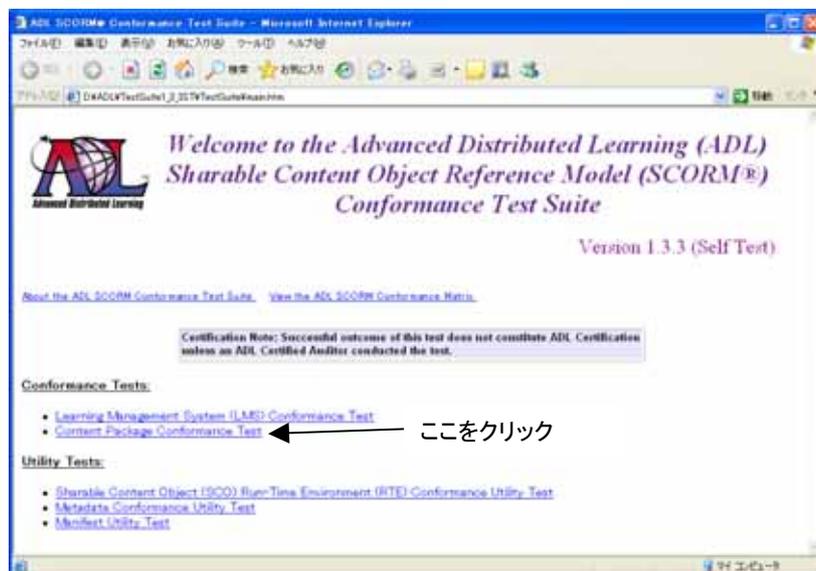
コンテンツ適合性検査の操作手順を説明します。

2-2-1 コンテンツパッケージ適合検査

- 1) デスクトップにある “ Test Suite 1.3.3 ST ” アイコンをダブルクリックして実行します。
- 2) “ Content Package Conformance Test ” をクリックします
- 3) 『警告 - セキュリティ』ダイアログが表示されたら、[はい]をクリックします。

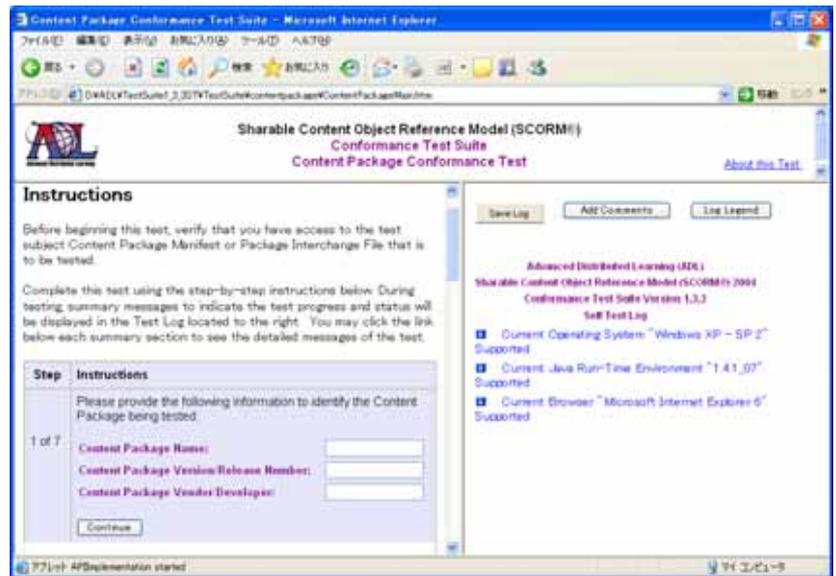
POINT !

[常に]をクリックすると、次回よりこのダイアログが表示されることなく使用できます。



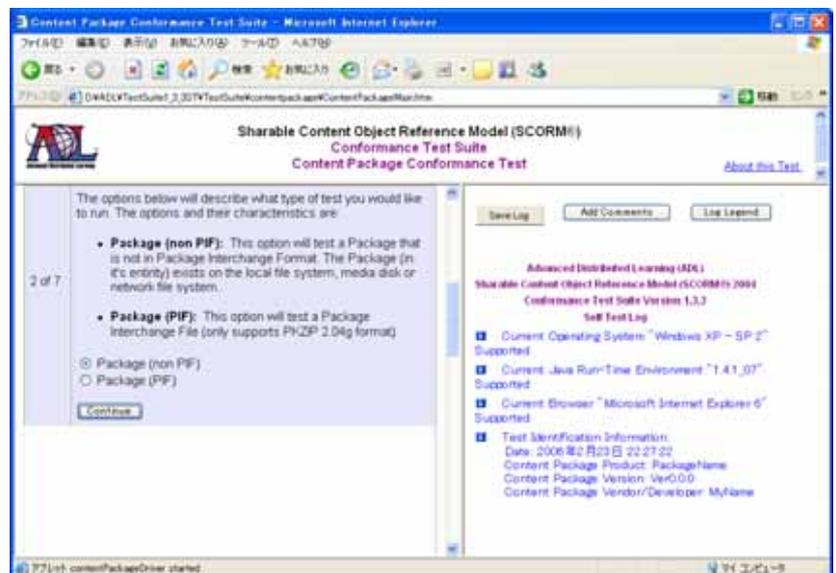
4) Step1of7

コンテンツパッケージ名、コンテンツのバージョン、コンテンツの製作者情報を入力し、[Continue]ボタンをクリックします。



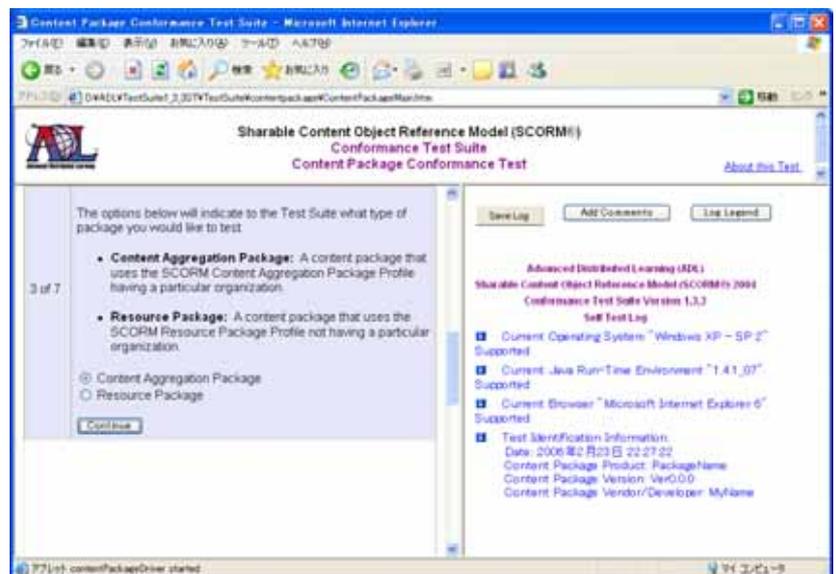
5) Step2of7

コンテンツのパッケージ形式を選択します。
ZIP ファイルの場合は、“Package(PIF)”を選択し、
それ以外の場合は、“Package(non PIF)”を選択し、
[Continue]ボタンをクリックします。



6) Step3of7

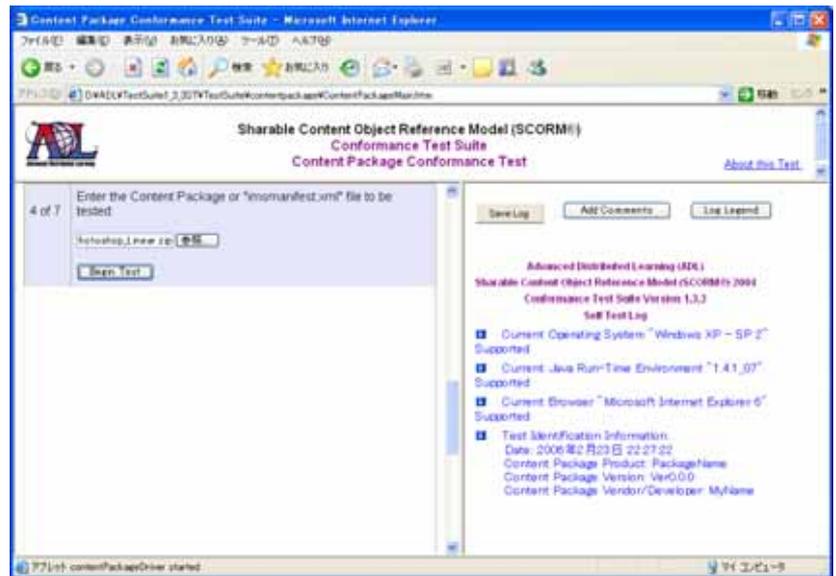
コンテンツの種類を選択します。
organization 情報が含まれるコンテンツの場合は、“Content Aggregation Package”を選択し、
リソース情報のみのコンテンツの場合には、“Resource Package”を選択し、
[Continue]ボタンをクリックしてください。



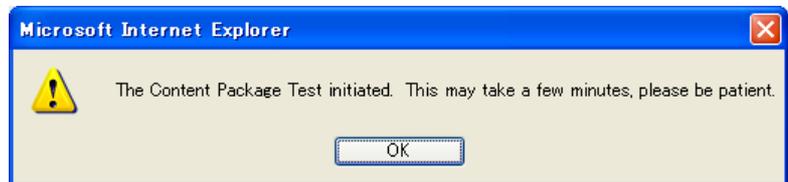
7) Step4of7

テストするコンテンツを指定します。

PIF ファイルを選択した場合は、コンテンツの ZIP ファイルを指定し、non PIF の場合は、“imsmanifest.xml”を指定し、[Begin Test]ボタンをクリックします。



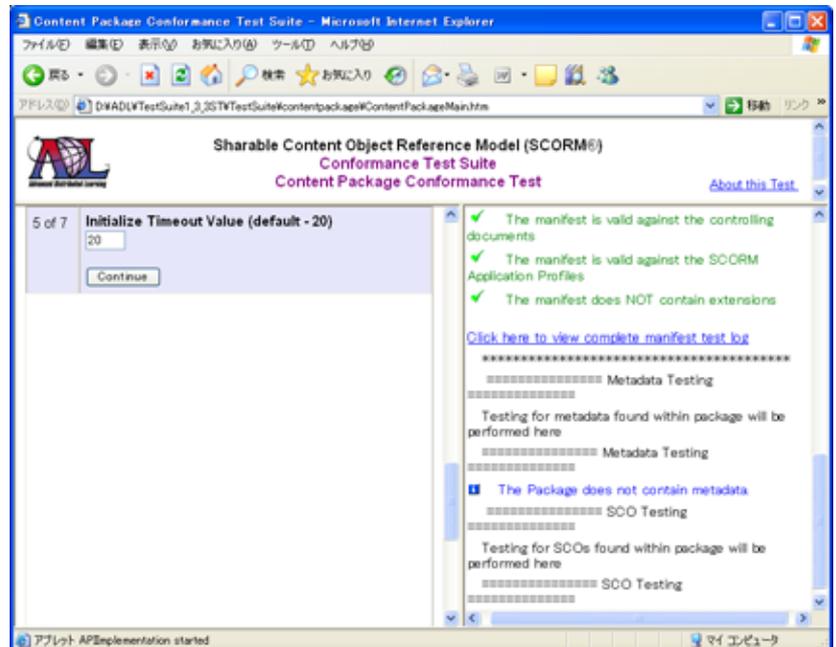
8) テスト開始のメッセージが表示されます。[OK]ボタンをクリックしてください。



9) テスト結果が、右側のウィンドウに表示されます。

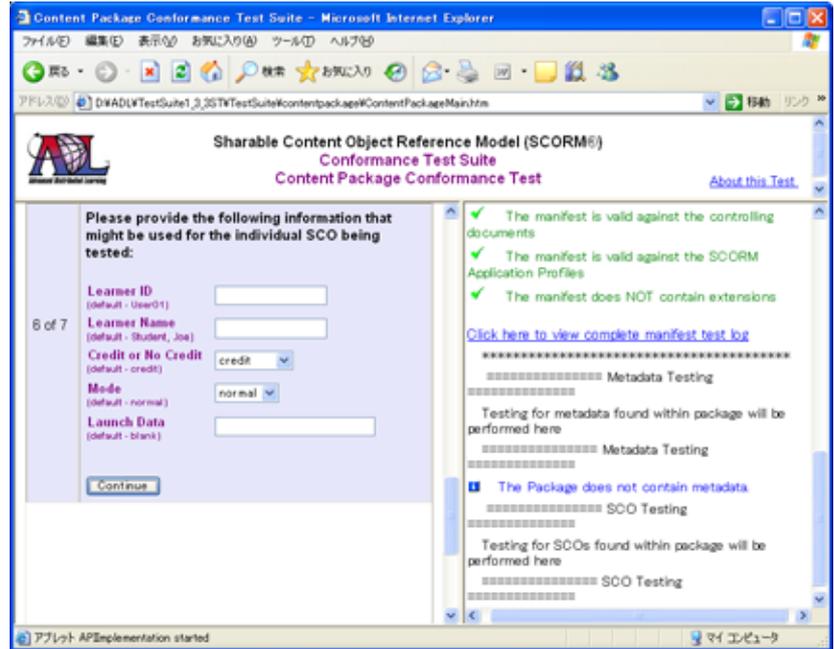
10) Step5of7

manifest のテストが終了すると、次のテストが開始されます。Initialize が実行されまでのタイムアウト値を設定します。この時間内に Initialize が行われないと、このコンテンツは Non-Conformant(不適合と判定されます。



11) Step6of7

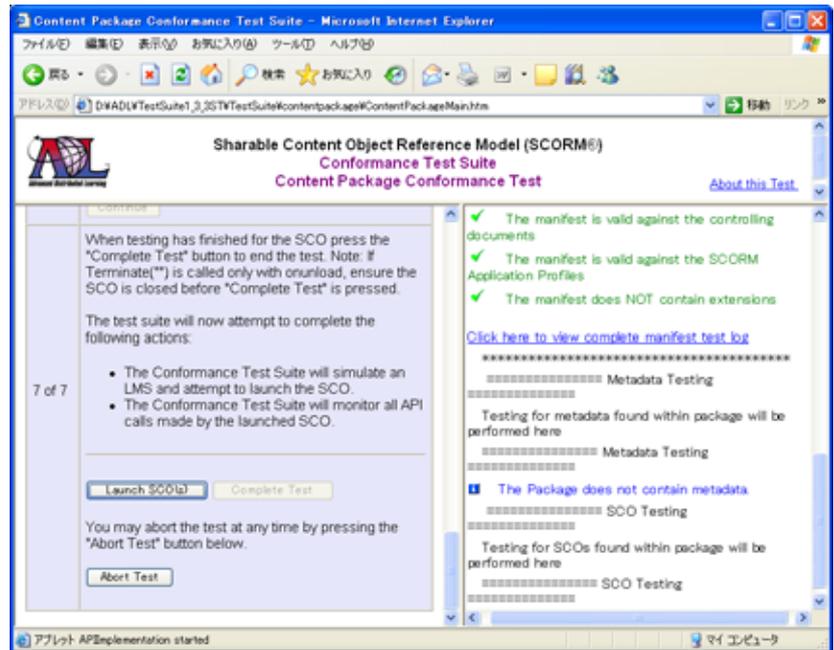
SCO にパラメータを設定する場合は入力してください。
[Continue]ボタンをクリックします。



12) Step7of7

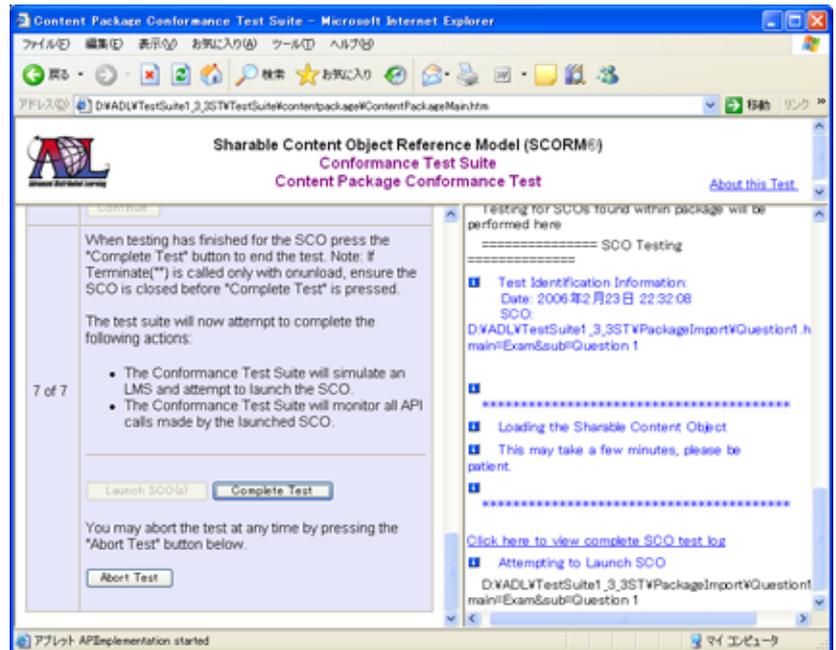
[Launch SCO(s)]ボタンをクリックすると、SCO のテストが始まります。

別ウィンドウで SCO が表示されます。



- 13) 1 ページ目の SCO のテストが終わると、次の SCO を起動します。

[Complete Test]ボタンをクリックして、次の SCO の Test が始まります。

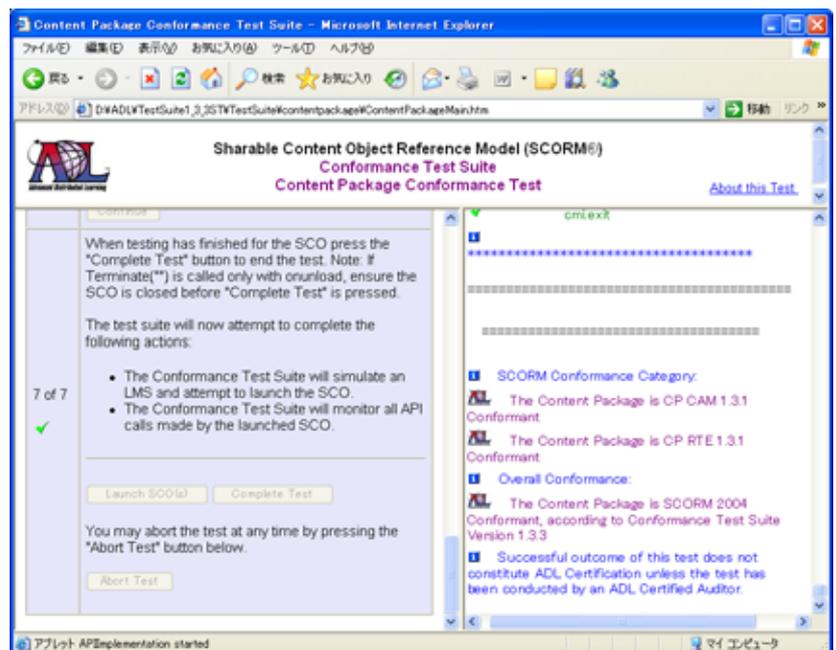


- 14) [OK]ボタンをクリックします。

これを繰り返し、すべての SCO のテストを行います。



- 15) SCO のテストが最後まで終わると、“7 of 7”の下に緑色のチェックが表示されます。適合試験は終了です。



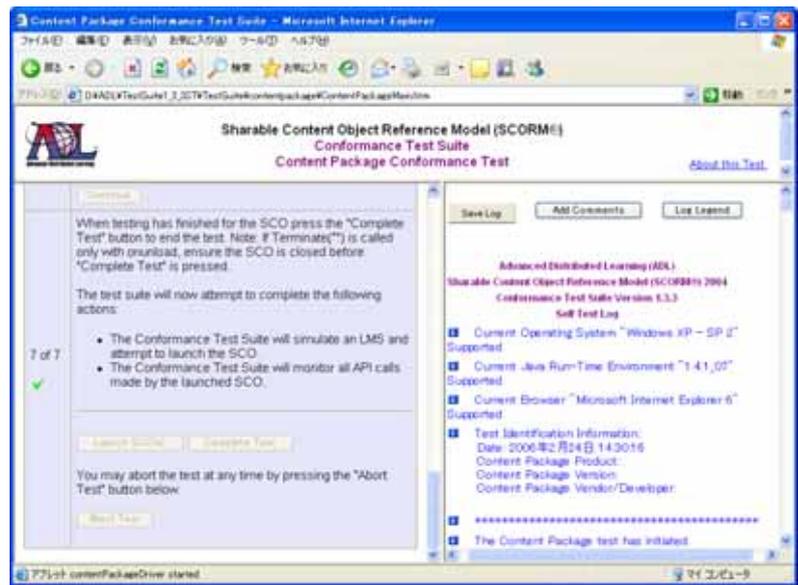
16) テスト結果を保存する場合には、右ウィンドウの一番上にある[Save Log]ボタンをクリックします。

[Add Comments]ボタンをクリックすると、ログにコメントを追加することができます。

POINT!

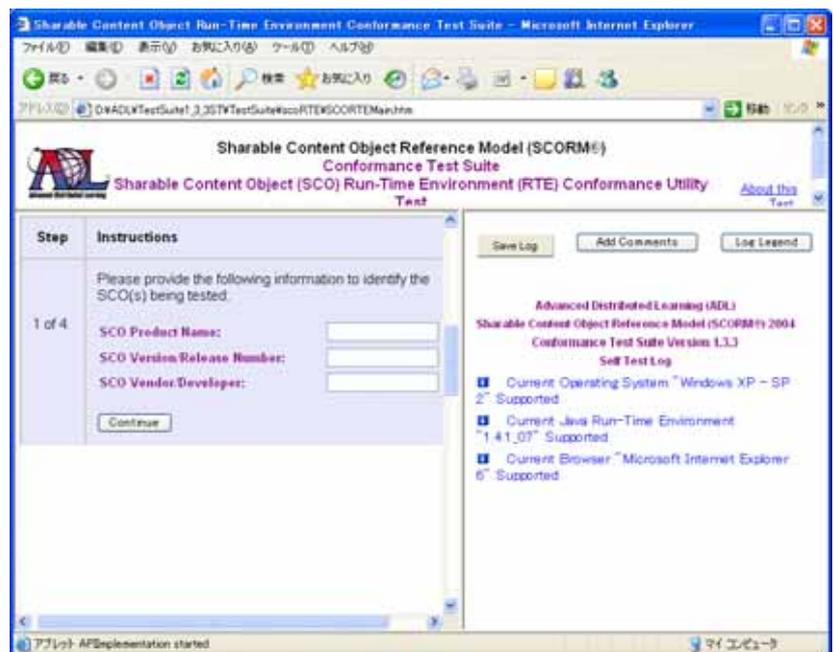
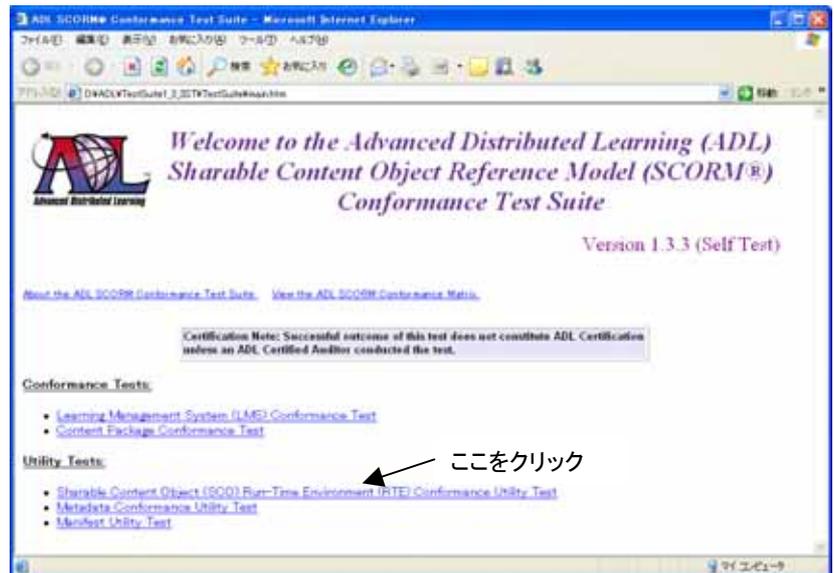
ここで保存された結果は summary です。詳細なログは、下記に保存されています。

<drive>:\<install_directory>\Test Suite\Logs\CP\Detailed\Log_<yyyymmddhhmmss>\CP_Log.htm



2-2-2 SCO ランタイム適合試験

- 1) デスクトップにある “ Test Suite 1.3.3 ST ” アイコンをダブルクリックして実行します。
- 2) “ Sharable Content Object(SCO) Run-Time Environment(RTE) Conformance Utility Test ” をクリックします
- 3) Step1of4
SCO 名、SCO のバージョン、SCO の製作者情報を入力し、[Continue] ボタンをクリックします。

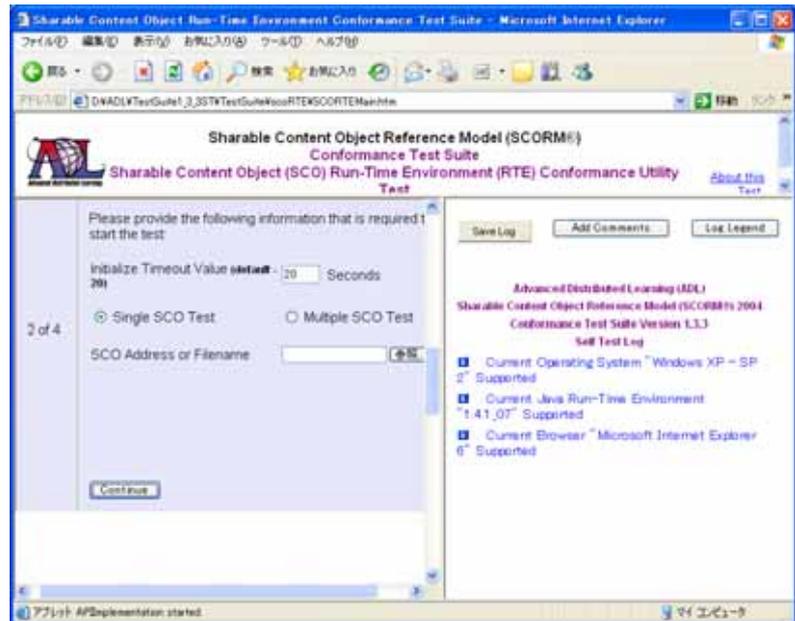


4) Step2of4

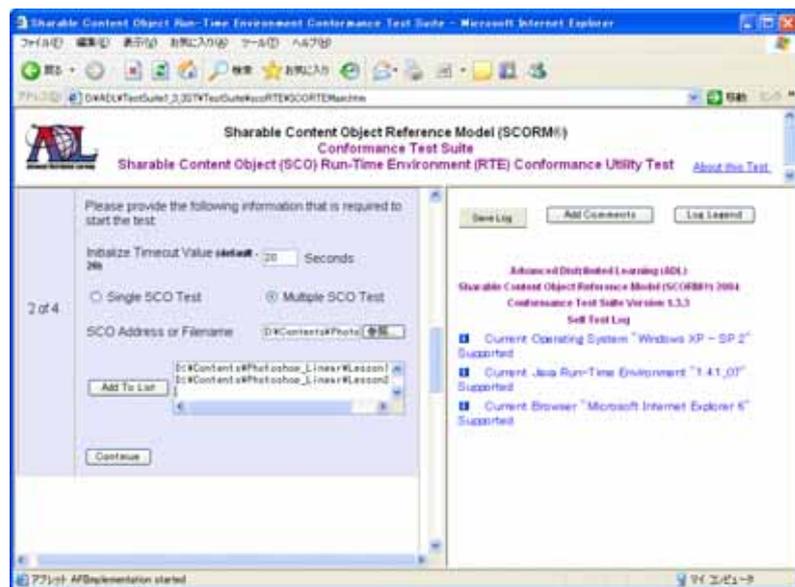
Initialize が実行されまでのタイムアウト値を設定します。この時間内に Initialize が行われないと、このコンテンツは Non-Conformant(不適合と判定されます。

- 5) 1つのSCOのテストを行う場合は、“Single SCO Test”を選択し、[参照]ボタンをクリックして、テストを行うSCOを指定し、[Continue]ボタンをクリックします。

複数のSCOのテストを行うには、“Multiple SCO Test”を選択し、[参照]ボタンをクリックして、テストを行うSCOを選択します。[Add Test List]ボタンをクリックすると、リストボックスに選択したSCOのパスが入ります。続けて[参照]ボタンをクリックして、SCOを選択します。テストを行うSCOをすべて選択したら[Continue]ボタンをクリックします。



【Single SCO Test を選択した画面】

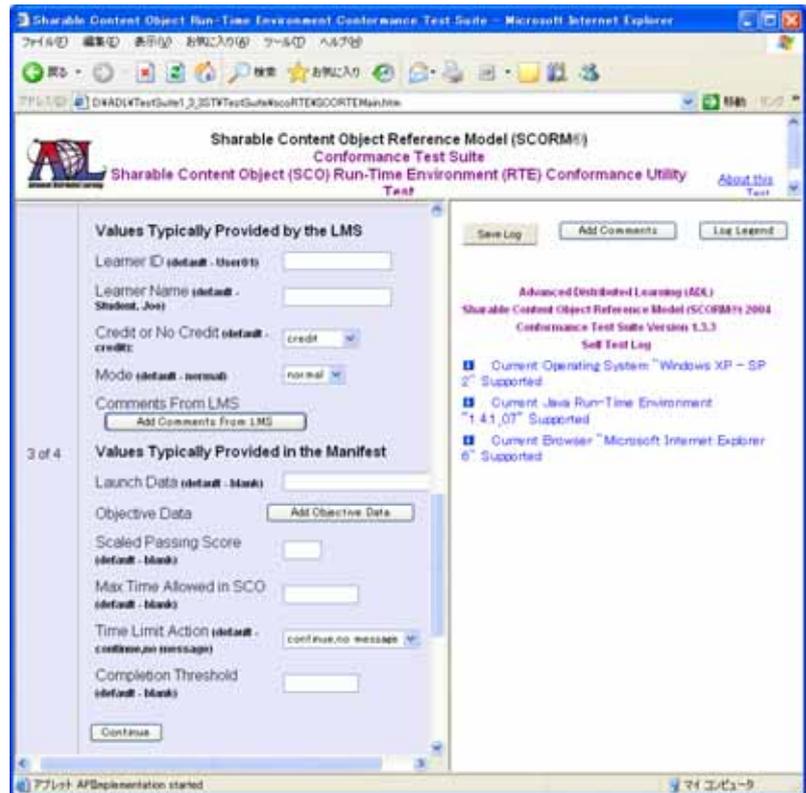


【Multiple SCO Test を選択した画面】

6) Step3of4

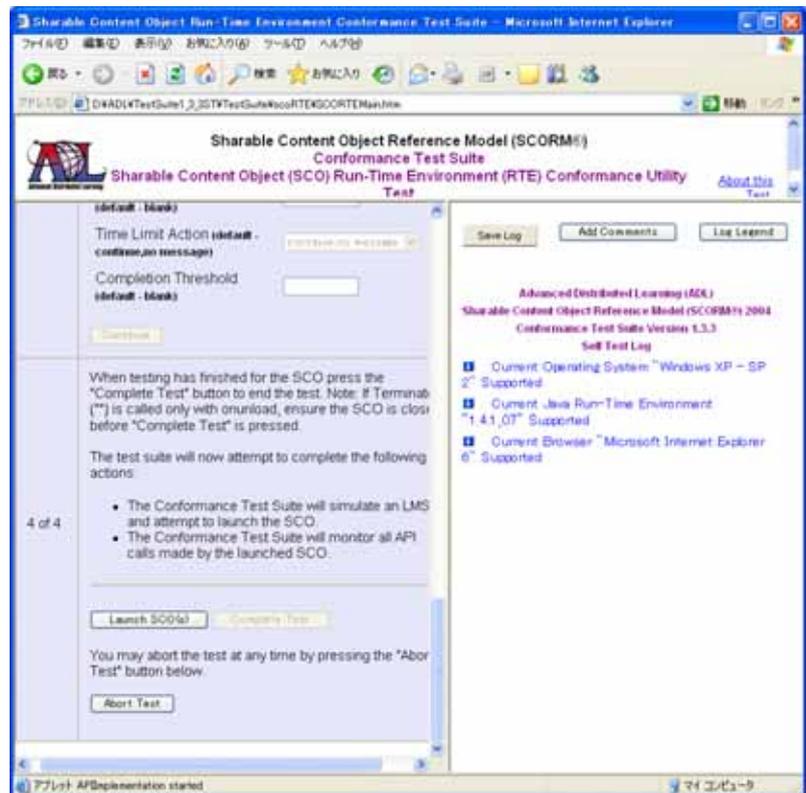
SCO にパラメータを設定する場合は入力してください。LMS から渡すパラメータを設定したり、Objective を設定することができます。

入力したら [Continue] ボタンをクリックします。

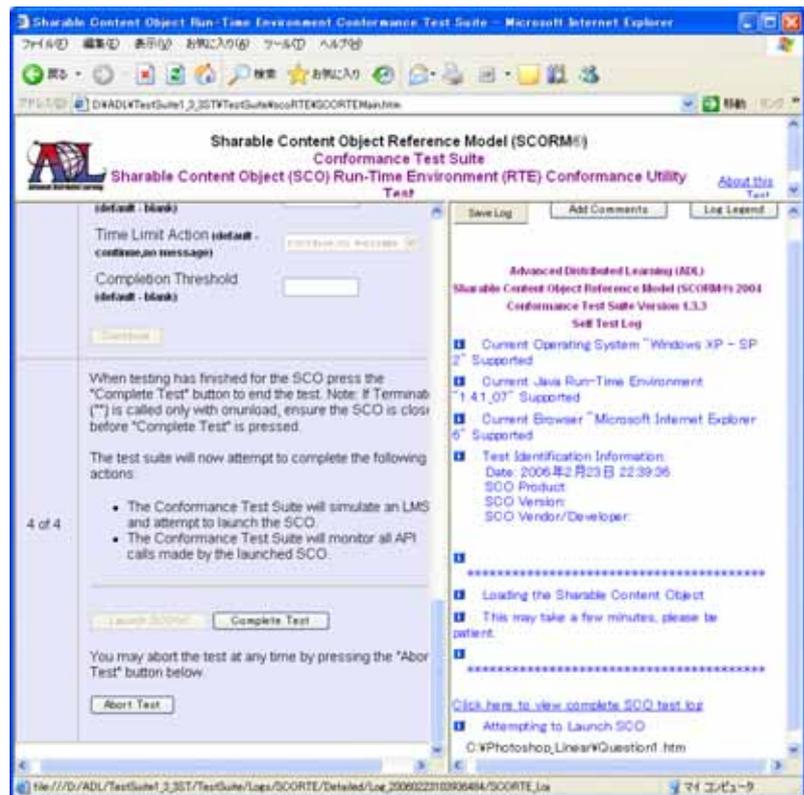


7) Step4of4

[Launch SCO(s)] ボタンをクリックすると SCO のテストが開始されます。別ウィンドウで SCO が表示されます。

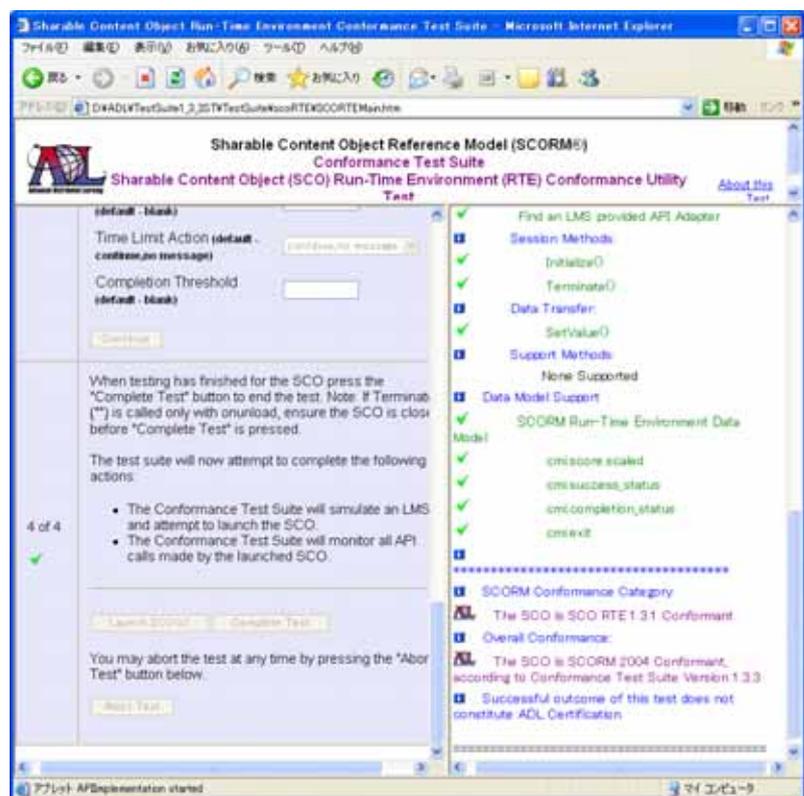


- 8) “ Multiple SCO Test ” を選択した場合は、[Complete Test] ボタンをクリックして、次の SCO のテストを開始します。



- 9) SCO のテストが終わると、“ 4 of 4 ” の下に緑色のチェックが表示されます。適合試験は終了です。

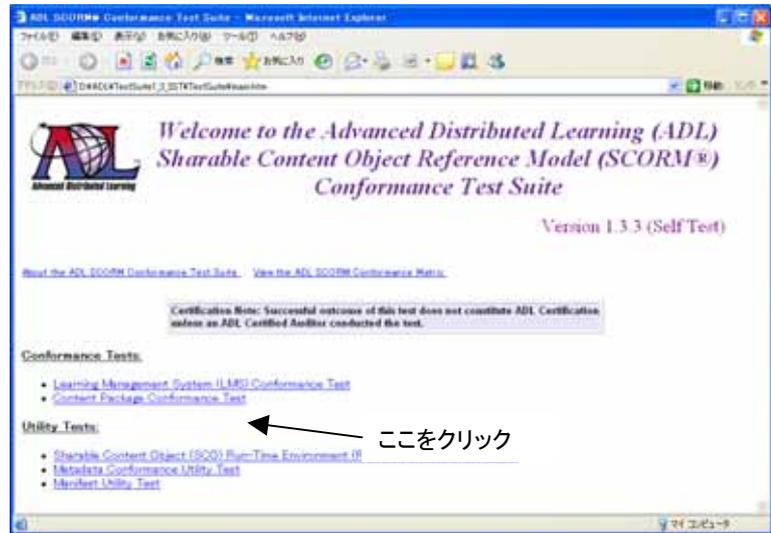
- 10) テスト結果を保存する場合には、右ウィンドウの一番上にある [Save Log] ボタンをクリックします。[Add Comments] ボタンをクリックすると、ログにコメントを追加することができます。



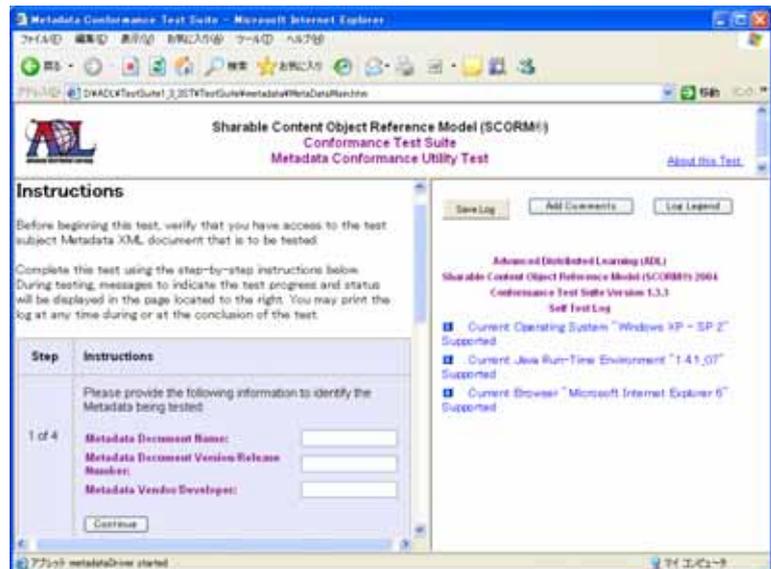
POINT!
 ここで保存された結果は summary です。詳細なログは、下記に保存されています。
 <drive>:\%install_directory%\ TestSuite\Logs\SCORTE\Detailed\Log_<yyyymmddhhmmss>\SCORTE_Log.htm

2-2-3 メタデータ適合試験

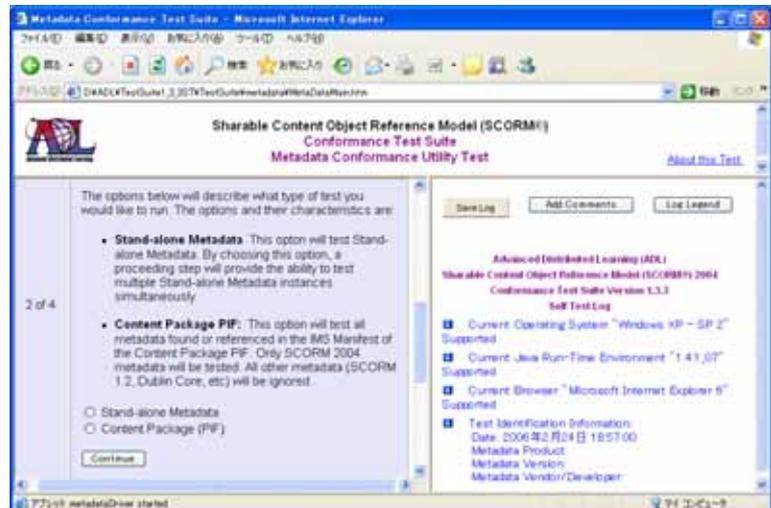
- 1) デスクトップにある “ Test Suite 1.3.3 ST ” アイコンをダブルクリックして実行します。
- 2) “ Metadata Conformance Utility Test ” をクリックします。



- 3) Step1of4
メタデータ名、メタデータのバージョン、メタデータの製作者情報を入力し、[Continue]ボタンをクリックします。



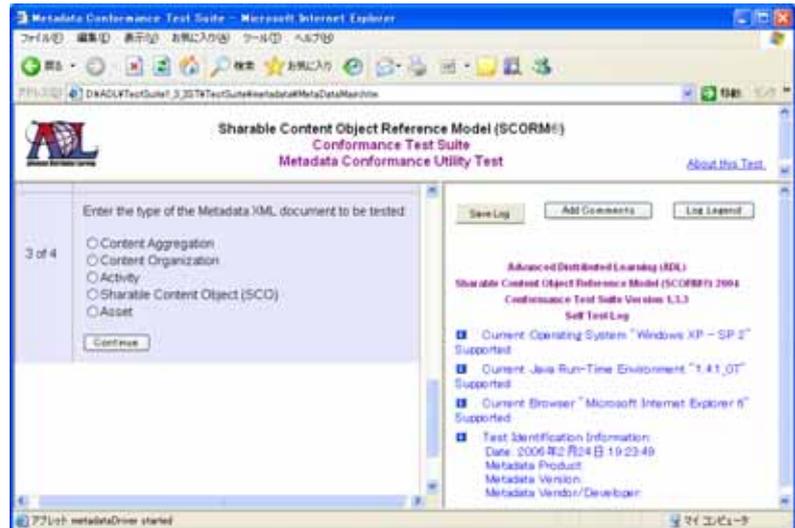
- 4) Step2of4
特定のメタデータを検査する場合は “ Stand-alone Metadata ” を選択し、[Continue]ボタンをクリックします。(P27-手順 5へ)
PIF ファイルを内のメタデータを検査する場合は、 “ Content Package(PIF) ” を選択し、[Continue]ボタンをクリックします。(P29-手順 9へ)



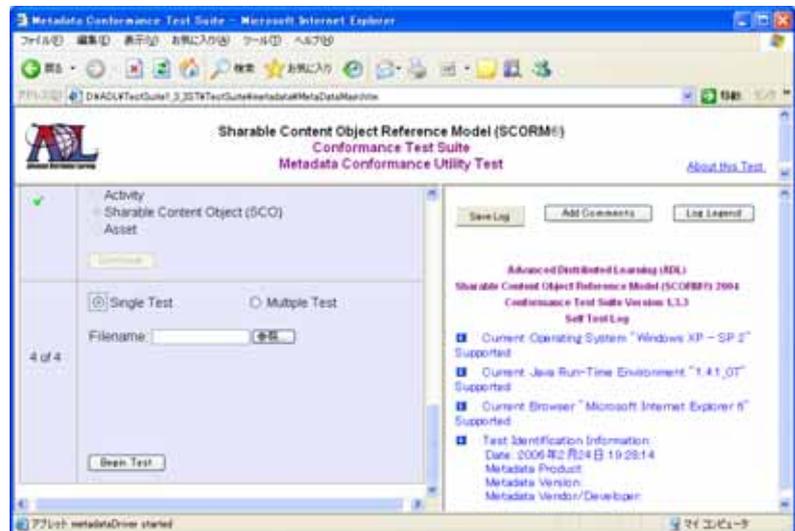
“Stand-alone Metadata”を選択した場合:

5) Step3of4

検査を行うメタデータのタイプを選択し、[Continue]ボタンをクリックしてください。

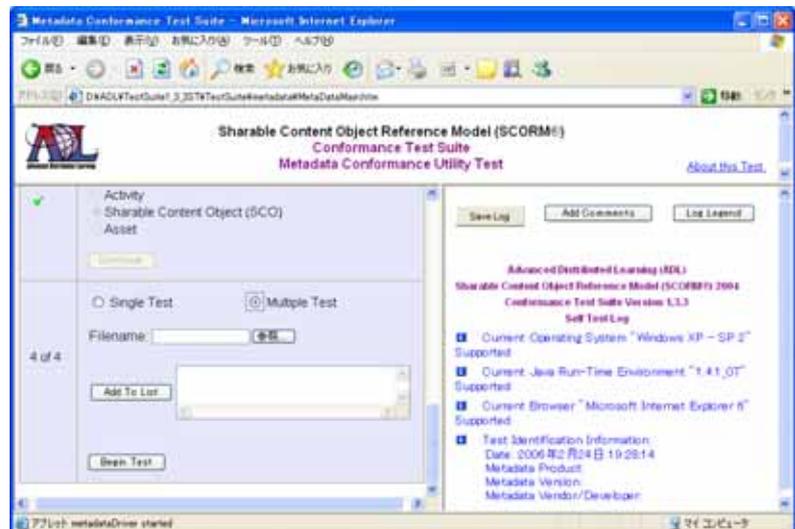


6) 1つのメタデータのテストを行う場合は、“Single Test”を選択し、[参照]ボタンをクリックして、テストを行うメタデータを指定し、[Begin Test]ボタンをクリックします。



【Single SCO Test を選択した画面】

複数のメタデータのテストを行うには、“Multiple Test”を選択し、[参照]ボタンをクリックして、テストを行うメタデータを選択します。[Add Test List]ボタンをクリックすると、リストボックスに選択したメタデータのパスが入ります。続けて[参照]ボタンをクリックして、メタデータを選択します。テストを行うメタデータをすべて選択したら[Begin Test]ボタンをクリックします。



【Single SCO Test を選択した画面】

7) メタデータのテストが終わると、“4 of 4”の下に緑色のチェックが表示されます。適合試験は終了です。

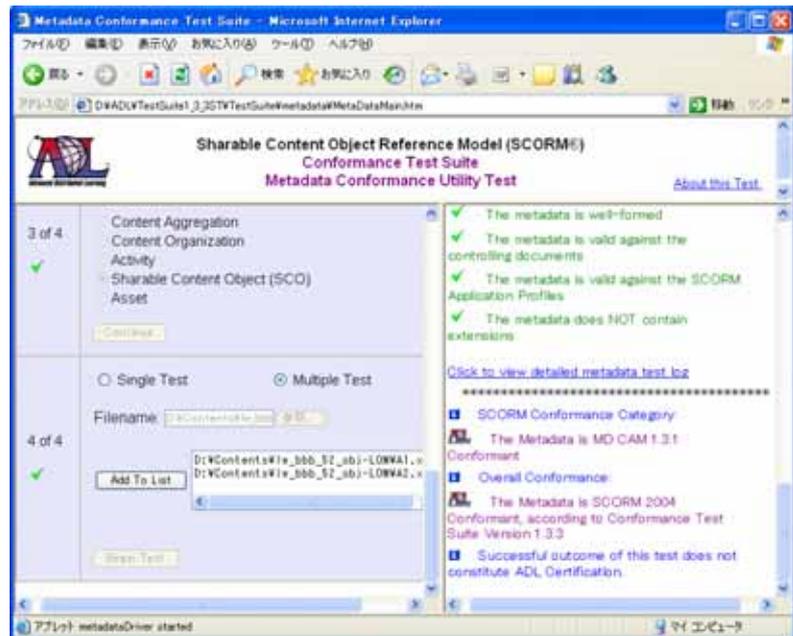
8) テスト結果を保存する場合には、右ウィンドウの一番上にある[Save Log]ボタンをクリックします。

[Add Comments]ボタンをクリックすると、ログにコメントを追加することができます。

POINT!

ここで保存された結果は summary です。詳細なログは、下記に保存されています。

<drive>:\%install_directory%\ Test Suite\Logs\MD\Detailed\Log_<yyyymmdd hhmmss>\MD_Log.htm



“Content Package(PIF)”を選択した場合:

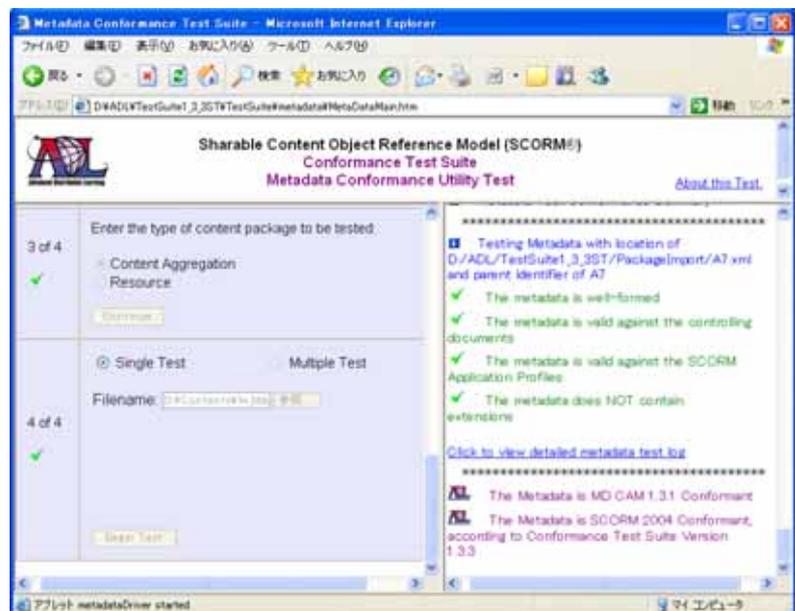
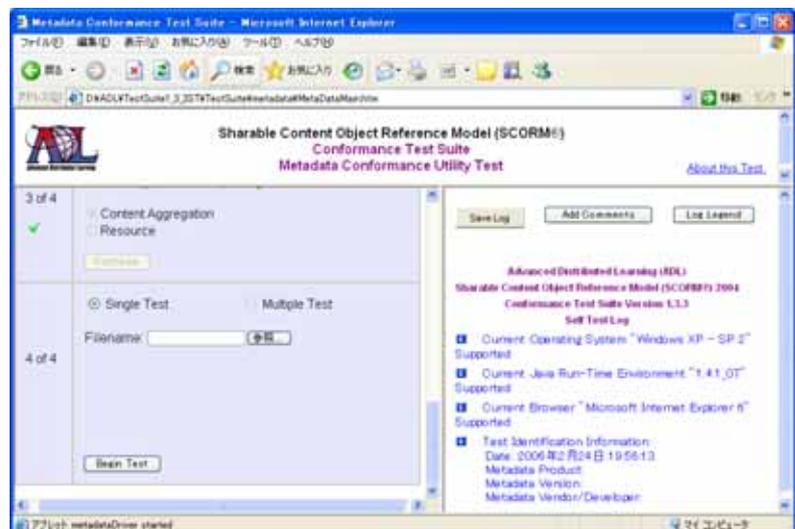
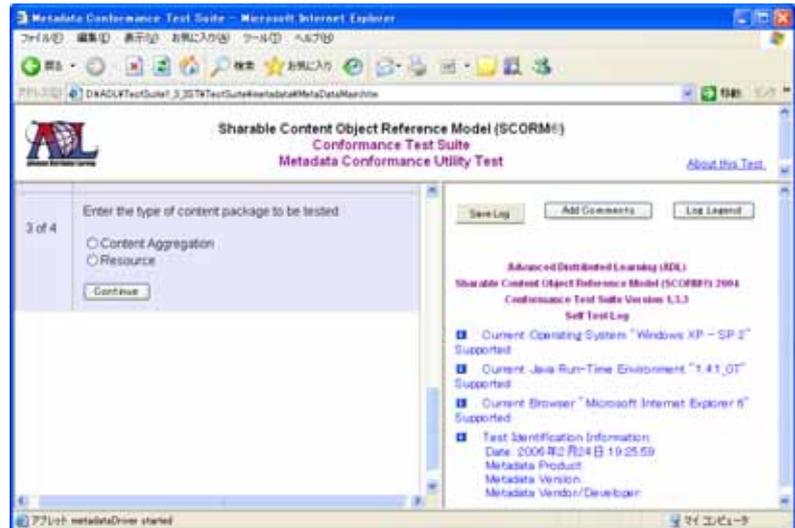
9) Step3of4

コンテンツの種類を選択します。

organization 情報が含まれるコンテンツの場合は、“Content Aggregation Package”を選択し、リソース情報のみのコンテンツの場合には、“Resource Package”を選択し、[Continue]ボタンをクリックしてください。

10) [参照]ボタンをクリックして、テストを行う PIF ファイルを指定し、[Begin Test]ボタンをクリックします。

11) メタデータのテストが終わると、“4 of 4”の下に緑色のチェックが表示されます。適合試験は終了です。



12) テスト結果を保存する場合には、右ウィンドウの一番上にある[Save Log]ボタンをクリックします。

[Add Comments]ボタンをクリックすると、ログにコメントを追加することができます。

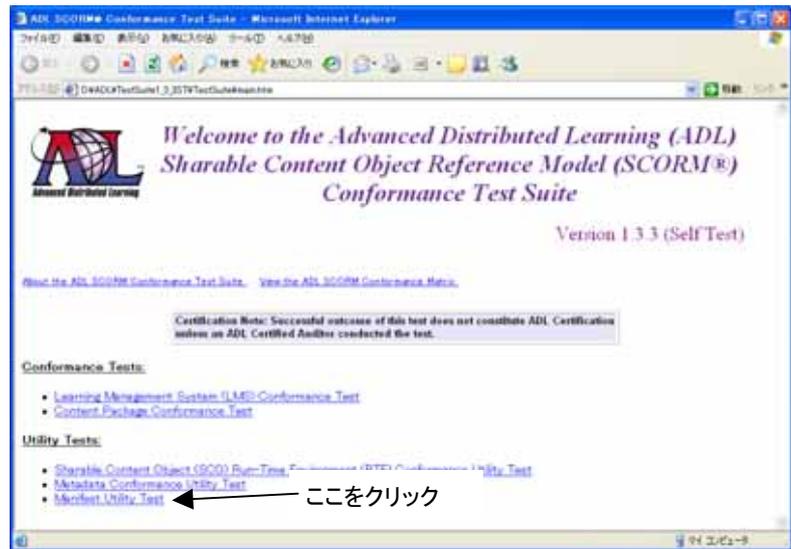
POINT!

ここで保存された結果は summary です。詳細なログは、下記に保存されています。

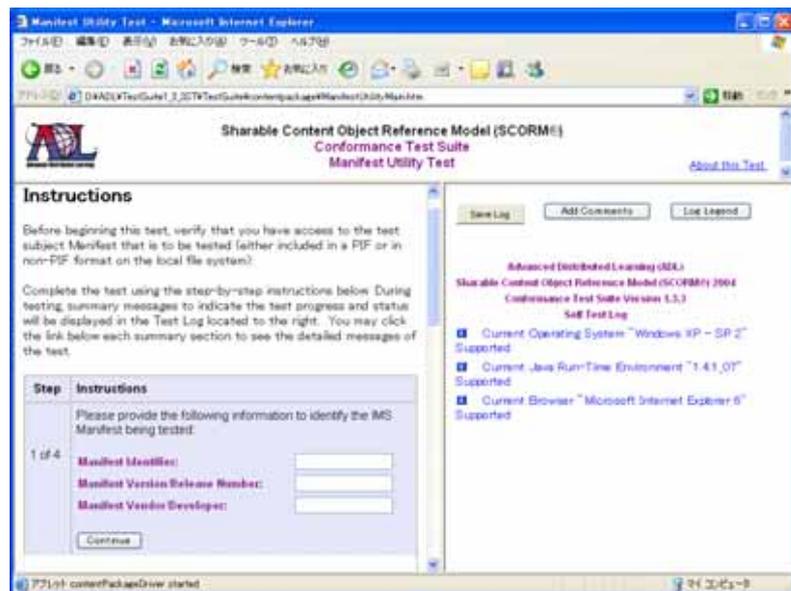
```
<drive>:\<install_directory>\          Test  
Suite¥Logs¥CP¥Detailed¥Log_<yyyy22ddhh  
mss>.htm
```

2-2-4 マニフェスト適合試験

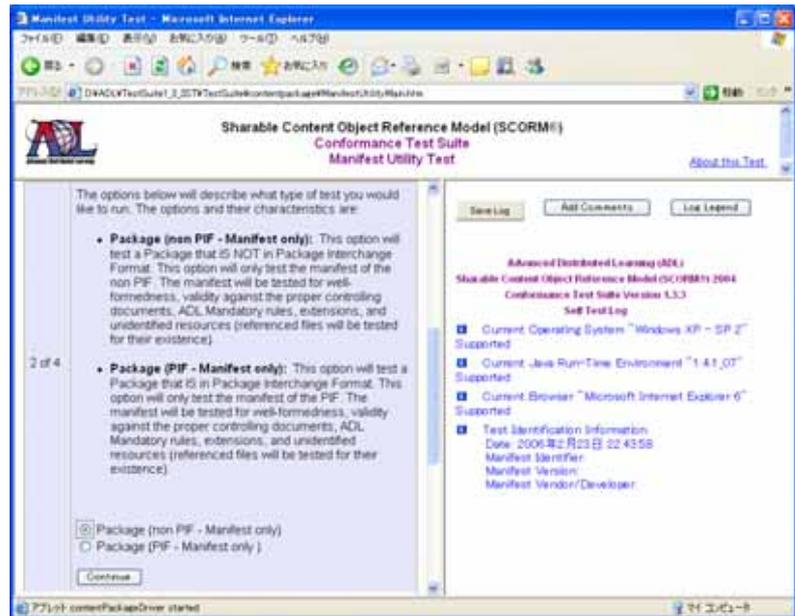
- 1) デスクトップにある “ Test Suite 1.3.3 ST ” アイコンをダブルクリックして実行します。
- 2) “ Manifest Utility Test ” をクリックします。



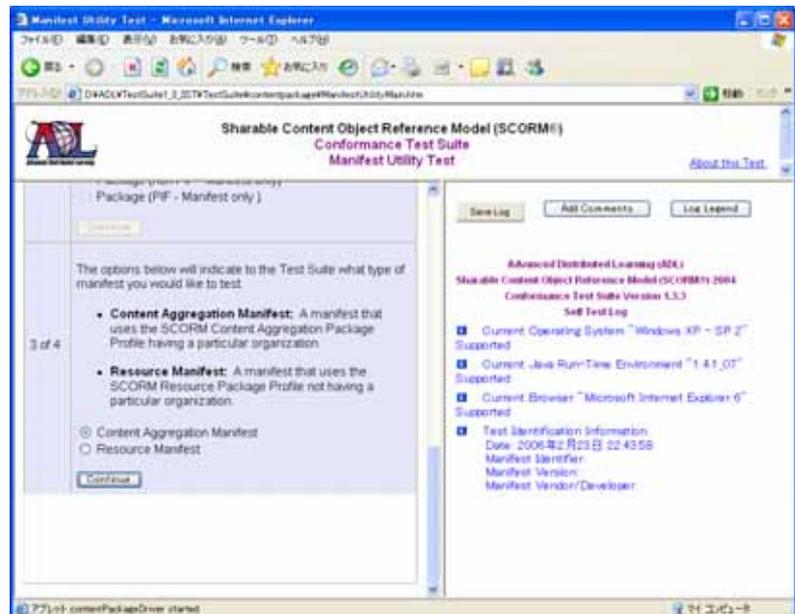
- 3) Step1of4
マニフェスト名、マニフェストのバージョン、マニフェストの製作者情報を入力し、[Continue]ボタンをクリックします。



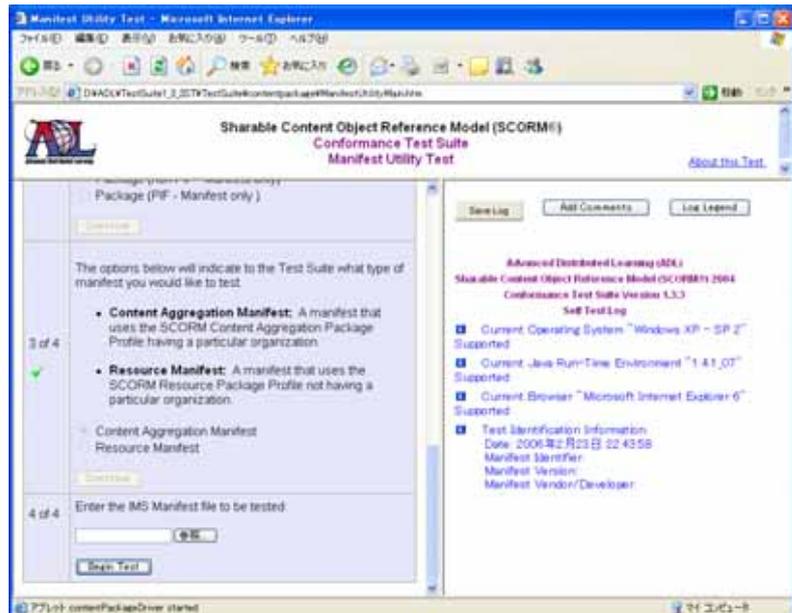
- 4) Manifest が ZIP 形式の PIF ファイルに含まれている場合は、“Package(PIF _ Manifest only)” を選択し、[Continue] ボタンをクリックします。それ以外の場合は、“Package(non PIF _ Manifest only)” を選択し、[Continue] ボタンをクリックします。



- 5) コンテンツの種類を選択します。organization 情報が含まれるコンテンツの場合は、“Content Aggregation Package” を選択し、リソース情報のみのコンテンツの場合には、“Resource Package” を選択し、[Continue] ボタンをクリックしてください。



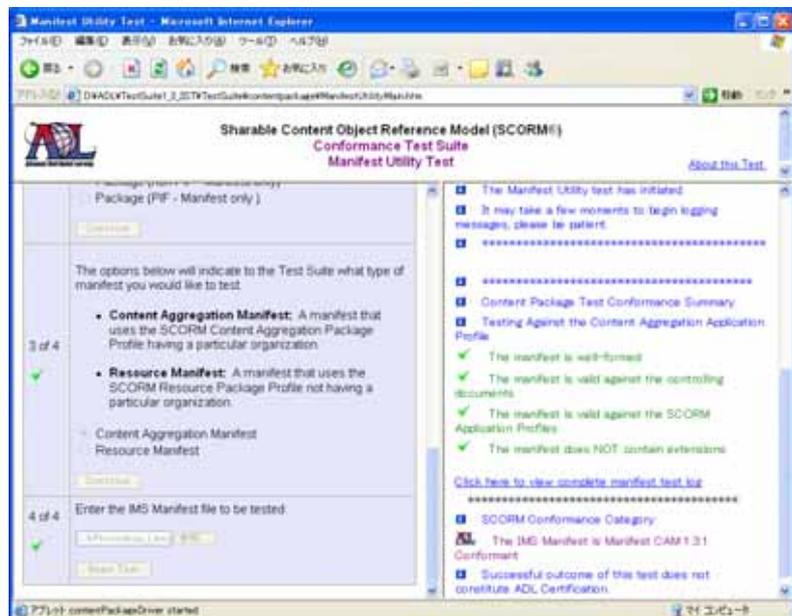
[参照]ボタンをクリックし、テストするマニフェストを選択し、[Begin Test]ボタンをクリックします。



6) テスト開始のメッセージが表示されます。[OK]ボタンをクリックしてください。



7) マニフェストのテストが終わると、“4 of 4”の下に緑色のチェックが表示されます。適合試験は終了です。



8) テスト結果を保存する場合には、右ウィンドウの一番上にある[Save Log]ボタンをクリックします。
[Add Comments]ボタンをクリックすると、ログにコメントを追加することができます。

POINT!

ここで保存された結果は summary です。詳細なログは、下記に保存されています。

```
<drive>:\%install_directory%\Test Suite\Logs\CP\Detailed\Log_<yyyymmddhhmss>\CP_Log.htm
```

2-3 検査結果

2-3-1 テストログのアイコンの説明

アイコン	色	説明
	Blue	インフォメーション
	Orange	警告メッセージ
	Green	合格の場合の適合検査結果
	Red	不合格の場合の適合検査結果
	Red	不適合もしくはエラーの発生により Test Suite が停止
	Purple	適合レベル
	Black	その他

2-3-2 LMS 適合マトリクス

適合レベル	
LMS SCORM 2004 Conformant	
適合カテゴリ	
<ul style="list-style-type: none"> ・ LMS Run-Time Environment Version 1.3.1 (LMS RTE 1.3.1) ・ LMS Content Aggregation Model Version 1.3.1 (LMS CAM 1.3.1) ・ LMS Sequencing and Navigation Version 1.3.1 (LMS SN 1.3.1) 	
適合カテゴリの要件概要	
LMS RTE 1.3.1	<ul style="list-style-type: none"> ◆ LMS が、アセットを起動できること ◆ LMS が、SCORM2004 規格に適合した SCO を起動できること ◆ LMS が、DOM オブジェクトとして API インスタンスを提供し、すべての API メソッドを実装していること ◆ LMS が、SCORM 2004 のランタイム環境のデータモデルのサポートを実装していること ◆ LMS が、SCORM 2004 のナビゲーションデータモデルのサポートを実装していること
LMS CAM 1.3.1	<ul style="list-style-type: none"> ◆ LMS が、SCORM 規格に適合したコンテンツパッケージをインポートし実行できること ◆ LMS が、コンテンツパッケージ内のマニフェストを基に SCORM ランタイム環境データモデルエレメントを初期化できること
LMS SN 1.3.1	<ul style="list-style-type: none"> ◆ LMS が、バージョン 1.3.1 の SCORM シーケンシングおよび SCORM ナビゲーションを含む中間コードによって、シーケンシングビヘイビアを実装していること ◆ LMS が、SCORM2004 ナビゲーションデータモデルエレメントのサポートを実装していること ◆ LMS が、ユーザインターフェースからのナビゲーション要求のサポートを実装していること

2-3-3 コンテンツパッケージ適合マトリクス

適合レベル	
CP SCORM 2004 Conformant	
適合カテゴリ	
<ul style="list-style-type: none"> ・ Content Package Content Aggregation Model Version 1.3.1 (CP CAM 1.3.1) ・ Content Package Run-Time Environment Version 1.3.1 (CP RTE 1.3.1) 	
適合カテゴリの要件概要	
CP CAM 1.3.1	<ul style="list-style-type: none"> ◆ コンテンツパッケージが、コンテンツパッケージの定義に従っていること ◆ コンテンツパッケージが SCORM 規格に則った構造情報を持つこと ◆ コンテンツパッケージが SCORM 規格に則った SCORM シーケンシング情報を持つこと ◆ コンテンツパッケージが SCORM 規格に則ったナビゲーション、プレゼンテーション情報を持つこと ◆ コンテンツパッケージが SCORM 規格に則ったリソース情報を持つこと ◆ コンテンツパッケージが SCORM 規格に則ったメタデータ情報を持つこと
CP RTE 1.3.1	<ul style="list-style-type: none"> ◆ Content パッケージは少なくとも 1 つの Sharable Content Object(SCO)リソースもしくは Asset リソースを含んでいること ◆ Manifest で特定されたすべての SCO リソースが SCO 適合要件に従っていること

2-3-4 SCO 適合マトリクス

適合レベル	
SCO SCORM 2004 Conformant	
適合カテゴリ	
<ul style="list-style-type: none"> ・ SCO Run-Time Environment Version 1.3.1 (SCO RTE 1.3.1) 	
適合カテゴリの要件概要	
SCO RTE 1.3.1	<ul style="list-style-type: none"> ◆ SCO が、SCORM Run-Time 環境バージョン 1.3.1 で定義されている DOM オブジェクトとして API_1484_11 という名前の API インスタンスを見つけること ◆ SCO が、Initialize("") 及び Terminate("") という API メソッドを呼び出せること ◆ SCO が動作している場合、データトランスファーメソッドを呼び出せること ◆ SCO が動作している場合、サポート メソッドを呼び出せること ◆ SCO がデータトランスファーモデルメソッドを使用している場合、SCO が、エレメントの要求にしたがって呼ばれるメソッドの中で使用されるすべての SCORM ランタイム環境データモデルエレメントを保障する

2-3-5 メタデータ適合マトリクス

適合レベル	
MD SCORM 2004 Conformant	
適合カテゴリ	
・ Metadata Content Aggregation Model Version 1.3.1 (MD CAM 1.3.1)	
適合カテゴリの要件概要	
MD CAM 1.3.1	<ul style="list-style-type: none"> ◆ メタデータは、SCORM Metadata Application Profiles (・ Asset Metadata Application Profile ・ SCO Metadata Application Profile ・ Activity Metadata Application Profile ・ Content Organization Metadata Application Profile ・ Content Aggregation Metadata Application Profile) の 1 つに従っていること ◆ Metadata が 1 つ以上の拡張を含んでいる場合、拡張が XML スキーマ定義 (XSD) に従った有効な形式であること